約束

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【Nコード】

N9324R

【作者名】

ヒロ

【あらすじ】

幼い頃に交わした約束：僕の中で大切な彼女と交わした約束。それから6年。約束の一部を忘れてしまった僕。全く連絡の取れない彼女。彼女は一体どこに？ 僕は何で彼女を追っているのだろうか？ 何気ない僕の生活が今、動き出す。

第1話 日常生活の中で（前書き）

新作です！ 今日から連載を開始させていただきます。
今回も恋愛ものですが、よかったですら読んでください。

第1話 日常生活の中で

『私、大きくなったら学くんとか…』

あの日、彼女は僕に1つの約束をした。僕も彼女も小さかったから、その時は何も感じていなかった。僕は約束をはっきりとは覚えていない。けど…彼女は僕の大事な友達で約束もすごく大事なことだったと思う…

あれから6年。僕・高橋^{たかはしまなび}学は18歳になり、この春、大学に進学した。大学と言ってもそこら辺にあるごく普通の大学だ。

「学、お疲れ」

講義が終わり、僕の親友・中山^{なかやまゆうと}優斗がやって来た。優斗とは小学校からの付き合いで僕の中で一番の親友である。

「お疲れ。講義、めんどいな」

「おいおい。学、まだ入学して3ヶ月だぜ？」

毎日の講義で勉強嫌いな僕は早くも心が折れそうだった。何で僕の名前は『学』なんだろうか…。そんな僕を優斗は支えてくれてい

る。優斗は勉強嫌いの僕とは正反対で、一生懸命の頑張り屋さん。何で僕と同じ大学にいるのか不思議に思えてくるほどだ。

「優斗は講義とか飽きないの？」

「うーん、まあめんどくさいって思うことはあるけど…飽きはしないかな」

僕にとって考えられない発言だ。講義が飽きないとか絶対に無理。

「じゃあ、そろそろ帰りますか」

「そうだね」

僕は平凡な毎日を過ごしていた。何も無い普通の生活。大学もこのまま終わっていくんだと思った。そんな時、ふと彼女のことを思い出す。一体、今は何をしてるんだろうか。どこにいるのかもわからない。そもそも僕のことを覚えてるかもわからない。それなのに…僕は彼女を追いかけ続ける。

「どうした？」

気がつくとも優斗がこっちを向いて、不思議そうに僕を見ていた。

「いや、何でも…」

「わかった！　また友美ちゃんのこと考えてたんだろ！」
「……………」

本当のことなだけに何も言えない。

「もういい加減、諦めろよ。友美ちゃんは、お前のことを覚えてるかもわからないんだぞ…それに誰も連絡さえ取れてないんだ。無理

だろ……」

「…僕は諦めないよ。宮本友美みやもとともみという人は僕の中にいる。だから絶対に……」

それ以上は言葉にならなかった。

「まあ、俺もお前がそこまで言うなら協力するけどな」
「ありがとう」

友美と初めて出会ったのは小学3年の時だった。一緒のクラスになつて偶然、席が隣同士だった。新しいクラスで緊張している僕に『よろしくね』と最初に言ってくれたのが友美だった。それから緊張がとれた僕は友美とたくさん話をした。家が近いということでもくさん遊んだ。楽しかった。友美といると何もかもが楽しかった。でも…別れは突然やってきた。小学校を卒業して、すぐのことだ。両親の都合で友美は引越すことになったのだ。

第1話 日常生活の中で（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

両親の都合で引越すことになった友美。その時、学は？

第2話以降も頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願ひします！

第2話 幼い頃の記憶（前書き）

第2話目です！

引越し当日。学と友美は…？

第2話 幼い頃の記憶

「友美ちゃん！」

友美が過ごす日、僕は全速力で友美の家に向かった。最初は友美が引越すことが怖くて、会わないつもりだった。けど…このまま何も言わないで友美が行ってしまうのが嫌だった。僕が着いた頃には、友美は出発する直前だった。

「友美ちゃん！！」

僕は急いで車に乗りかけていた友美に駆け寄る。

「学くん！」

「良かった…間に合った…」

僕の息は完全に切れていた。咳き込む僕を見て、友美は僕の背中を優しくさする。

「大丈夫？」

「うん。大丈夫。これくらい何ともないよ」

友美に会いたいと思った気持ちを考えればこれくらいのこと何もなかった。

「学くん…ありがとう」

友美は僕の背中をさすりながら言う。僕は恥ずかしかった。

「私、学くんたくさん話せて、遊べて…すごく楽しかったよ」
「ぼ…僕も友美ちゃんとたくさん遊べて楽しかったよ！」

ようやく呼吸が落ち着いてきた僕は深く息を吸いながら友美にそう言う。その後、友美の両親に無理を言っつて、30分だけ遊ばせてもらえることになった。その30分は今でも驚くほどあっという間に過ぎていった。

「友美ーそろそろ行くわよ」

「はい。今行くよ」

そう言っつて友美は僕を見る。本当に引っ越しちゃうんだと思うと涙が出そうだった。

「学くん、本当にありがとう。また一緒に遊ぼうね」

友美は満面の笑みで僕に言う。

「うん。絶対にまた会えるよね？」

「じゃあ、約束しようよ。またいつか絶対に会っつて」

「うん！ 約束だね！」

「あと…私、大きくなっつたら学くんと…」

僕の記憶はここで途切れている。この後、友美と別れてどうしたのか。僕は泣いたのか。何も記憶が無かった。まるでこの記憶だけ抜かれたかのように。

気がつくと僕は自分の部屋で寝ていた。そういえば…優斗と別れた後、家に戻ってきた僕はすぐにベッドに横になってたんだっけ？ そのまま眠ってたのか…。どうやら夢を見ていたみたいだ。友美と別れた時の夢…これで何回目だろうか。ゆっくり起き上がり、携帯電話を手に取る。時間は午後8時。メールが5通入っていた。全部、優斗。どのメールも僕のことを心配してくれたメールだった。

『学、今日のお前、何か変だったぞ？ 体調でも悪いのか？ 友美ちゃんのこと気がなるのはわかるが…あまり思い詰めるなよ。今日は、ゆっくり休め。宿題は明日見せてやるから。じゃあ、また明日な』

優斗が一番、僕のことをわかってくれている。僕がわがまま言っても、愚痴を言っても…何でも話を聞いてくれる。すごく優しい人だ。僕はメールを返して、再び目を瞑った。その時だった。

『ピンポーン』

インターホンが鳴った。こんな時間に誰だろうか？ 僕は、ゆっくり玄関へと向かう。

「はい？」

「何を呑気に過して…！」

相手の叫び声で僕は完全に目が覚めた。

「うわ！ 池田さん！？ 何で家に!?!」

家にやってきたのはバイト先の先輩の池田裕也さん。

「何で家にだと!? お前、今何時だと思ってるんだ!」

そう池田さんに言われて、時計を見る。

「午後8時ですけど…あつ」

言いながら気がついた。そういえば…今日のバイトって…

「やっと気がついたか。ほら、早く行くぞ」

「は…はい!」

僕は、すぐに準備をして家を出る。今日のバイトは午後7時から。もう1時間も遅刻だ。バイト先に着いた時には午後8時30分。恐る恐る店に入る。

「すみません…遅れました!」

入ると僕と同じ大学生の佐藤武美さんが僕に寄ってくる。

「こんばんは。学くん。あっちでチーフが待ってるわよ」

「…わかった。怒られてくるよ…」

「来て早々そんなにテンション落とさないでよ…」

僕は奥の部屋に入る。

「おう。高橋」

チーフが手招きをする。僕はゆっくり用意されていたイスに座る。

「遅れてしまつてすみません」

「何で遅れた？」

「ちよつと…考え事をしてたら、寝坊してしまつて…」

僕は、これからどんなことを言われるのかビクビクだった。しかしチーフから返ってきた言葉は意外だった。

「そうか。まあ、これから気をつけてくれ。お前がいないと佐藤が大変なんだ。佐藤に謝っておけよ」

「は…はい」

何かチーフって怖いイメージだったから安心した。

「じゃあ、今日も頼むぞ」

そう言つてチーフが席を立つ。

「あ、そうそう。今度、遅刻したら許さんからな」

「はい…」

前言撤回。やっぱりチーフは怖い。まあ、何度も遅刻したら怒られるのも当たり前だよな…気をつけよう。

「おかえり。どうだった？」

持ち場に戻ると武美さんが心配そうに僕を見る。そんなに心配されてたのか…

「特に怒られなかったよ。『今度、遅刻したら許さん』って忠告はされたけど…」

「学くんも遅刻することあるんだね。何かあったの？」

「ちよつとね」

そう言いながら、また友美のことを考える。今、どこにいるかだけでも知りたい。僕は友美のことを考えながらバイトをこなしていた。午後11時、仕事を終えた僕は帰る準備に入る。

「お疲れ様」

少し遅れて武美さんがやって来た。

「今日も疲れたな…バイト、遅刻しちゃってゴメンね」

「ううん。気にしなくていいよ。でも、学くんが遅刻するとは思ってなかったな」

「バイトのことすっかり忘れてた…」

今日は本当にバイトなんて頭の隅にさえ無かった。それくらい僕は友美のことを考えていた。

第2話 幼い頃の記憶（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

友美のことが頭から離れない学。それにしても…他の人に心配されるほど考えてるって…学にとって友美には相当な思い入れがあるんでしょうね。

第3話も頑張ります！

第3話 変化（前書き）

第3話目です！

友美のことを思い続けている学。ある日のバイトで…？

第3話 変化

バイトを終え、武美さんと話しながら家に帰って来た僕は自分の部屋へと直行し、そのままベッドに倒れこむようにして寝た。気がつけばあつという間に朝になっていた。

「うーん、もう朝か…」

疲れもあつたせいも、全然寝た気がしなかった。僕は今日の講義科目を確認し、教科書類をバッグに詰め込む。1階に下りると朝ごはんが用意されていた。僕の両親は仕事朝早いので、いつもごはんを用意してくれている。

「いただきます」

僕は用意された朝ごはんを食べ、作ってくれた弁当をバッグに入れる。そして朝ごはんを食べ終えた僕は重い腰を上げ、学校の準備を続ける。全ての支度を終え、玄関に向かう。これからまた長い講義が始まると思うと憂鬱だった。そんなことを考えながら家を出る。

「おはよう」

家から出た途端に優斗に出会った。

「あれ？ 何でいるの？」

「そりゃあ、俺の学校へ行く通り道だからな」

確かにそうだけど…偶然なのかな？

「まあ、そんなことはいい。ほら、行くぞ」
「うっ…うん」

ちよつと疑問が残ったが、気にしないで優斗と学校に行くことにした。

「そついえば…学、体調は大丈夫か？」

「えっ？」

「昨日は心配したんだぞ。途中から返事もしないし」

「あ…ゴメン。ちよつと考え事しててさ…今日は大丈夫」

昨日は、そんなに考えてたのか…。優斗にも武美さんにも悪い事をしたな…。

「どうせ友美ちゃんのことだろ？」

「うっ…」

「まあいいけどさ…あまり一人で抱え込むなよ？ そんなんじゃお前の身体が持たないぞ」

確かに優斗の言うとおりだ。現に昨日の疲れが取れていない状態だし…。

「ありがとう」

その日の講義は優斗の言葉もあったせい、いつも以上に集中できた気がする。

講義を終えた僕は家に帰ってきて、今日は絶対に遅刻出来ないバイトへの準備をする。バイトの時間を確認して僕は家を出た。今日は遅い時間のバイトだ。

「こんばんはー」

今日は時間通りに来れた。2日続けて遅刻したら、チーフはどんな顔をするんだろうか。きっと…想像しただけで身体が震えた。

「こんばんは。今日は時間通りだね」

武美さんがいつものように僕のところにやってくる。まあ、この時間はあまりお客さんもないし…武美さんと話していても問題はない。

「さすがに今日は遅刻出来ないよ…。武美さんにも悪いし」

「私？」

「うん。昨日、迷惑かけちゃったしさ」

まあ何度も遅刻してたら、クビになっちゃうだろうしね。僕は昨日のことを反省していた。

「別に気にしなくてもいいのに…。まあ遅刻されたら寂しいし、困るけど…」

そう言って武美さんから一瞬、笑顔が消える。

「武美さん？」

遠くを見つめる武美さんを呼ぶ。すると『何？』と言って笑顔でこっちを向いてくれた。さっきは一体、どうしたんだらうか？ まあ気にしても仕方ない。

「そろそろ仕事しますか」

僕は武美さんにそう言って、商品を並べていく。お客さんがいないため、この時間のうちに乱れている商品などをきちんと並べなければならぬ。僕が商品を並べ始めて10分。1人の女性がやってきた。

「いらっしやませー」

僕は一旦、商品を並べるのをやめる。レジの方を見ると武美さんが目で合図をする。『こっちはいいから』という合図だ。僕は再び商品を並べ始める。

「すみません」

商品を並べていると後ろから声をかけられた。

「はい？」

僕は振り返った。そして…僕は自分の目を疑った。そこには友美にそっくりな女性が立っていた。僕の中で時間が止まったかのよう

だった。

「あの〜どうかしましたか？」

その女性は困ったというように僕を見る。

「い…いえ。それで何でしたっけ？」

女性の話によると卵を探しているらしい。僕は卵のある場所へ案内する。まあ、こんな小さいコンビニなので案内するのは簡単である。卵のある場所へ案内すると女性は深々と僕に頭を下げる。

「ありがとうございます」

何度も女性は言った。何もかも友美にそっくり。女性は卵を買ってコンビニを出た。

「学くん」

武美さんが手招きをしている。何か嫌な予感がする…。

「何でしょうか？」

「さっきの子って学くんの知り合い？」

僕は、どう答えていいかわからなかった。

「昔、仲が良かった子に似てたんですよ」

答えは結局あいまいになってしまった。僕には断定できるほど自信がなかった。

「ふ〜ん。そうなんだ。何かいろいろ話してたみたいけど？」
「そんなことないですよ。案内してただけです」

武美さんは相変わらず不満そうな顔をしている。僕は、そんなに悪いことをしたのだろうか？

「学くんってさ…」

「はい？」

「ううん。何でもない。ほら仕事仕事」

武美さんは強引に話を終え、仕事に戻る。僕は何を意味しているのかわからなかったが、とりあえず仕事に戻ることにした。武美さんは一体、何を言いたかったんだろう？ そう思いながら、僕は友美にそっくりだったさっきの女性のことを考えていた。あれは友美だったんじゃないか。勇気を持って話しかけてみればよかったと何度も思った。でも、本当に友美だったら…あの反応からすると僕のこととは完全に忘れているのかもしれない。それとも気付かなかっただけ…？ 僕の心の中は複雑だった。

第3話 変化（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

武美の様子に変化が…一体、何が起きたのか？
そして友美に似ている人って…友美なのか？

第4話も頑張りますのでよろしくお願いします！

第4話 おかしな様子（前書き）

第4話目です！

武美の様子が…？ 悩む学に待っているのは…？

第4話 おかしな様子

いつも通りバイトを終え、帰る支度をしているといつもし遅れてくるはずの武美さんがなかなか来ない。僕は何かあったのかもと思ひ、レジへと向かった。

「武美さん？」

武美さんはレジの横で俯いていた。武美さんの周りだけ時が止まったかのように武美さんはピクリとも動かない。

「武美さん？」

僕は武美さんに近寄り、改めて名前を呼んでみる。しかし返事は無かった。どうすればいいのかわからず、ただただ立ちすくんでいた。コンビニとは言え、この時間まで遅くなるとほとんどお客さんも来ないので、この状況が何か影響を及ぼすことはほとんどない。次の時間のバイトの人もまだ準備中。でも、このままにしておけない。そんなことを思っていた時だった。

「あれ？ 学くん、どうしたの？」

突然、武美さんが顔を上げた。僕は、すごくホツとした。

「あ…武美さん。あまりに遅いから心配になって…」

「ありがとう。ゴメンね」

「いや、武美さんが大丈夫ならいいですけど…」

何個も聞きたいことがあるのだが、全て頭の中から飛んでしまっ

た。

家に帰ってきた僕は眠たかったのだが、寝れなかった。コンビニにやってきた友美似の女性の事、いつもと様子の違った武美さんのこと。考えてもどうしようもないことは自分が一番わかっている。だけど…僕の頭は、そのことではいっぱいだった。

「うん…」

もちろん考えたことで答えが出てくることは無い。僕は悩みながら夜を過ごした。

「あれ？ 明るい…」

それから何時間が経っただろうか。気がつけば朝になっていた。結局、僕は一睡もできなかった。そのまま僕は学校の準備を始める。そしていつも通り学校へと向かう。学校に着いてからも頭の中は昨日の出来事でいっぱいだった。とてもじゃないけど講義を聞く気になんてなれなかった。

「おい、学」

いつの間にか今日の講義は終わっており、遠くから優斗の声が聞こえた。

「何？　どうかした？」

僕は優斗に心配をかけないようにと元気良く言った。

「いや、特には無いんだが…講義も終わったし、帰ろうかなと」

「あゝゴメン。今日は直でバイトなんだ」

「そっか…なら仕方ないな」

優斗は残念そうだった。直接バイトに行くことは、ほとんどないのだが…たまにあり、今日がその日だ。

「ゴメンね」

「気にすんな。バイトなら仕方ない。バイト頑張れよ」

そう言って優斗は僕に手を振り、教室から出ていった。それから少しして僕もバイトの時間が近づいていたので学校を出た。

バイトに向かうといつもいるはずの武美さんがいなかった。武美さんに限って僕より遅く来ることなんて無いはずだ。何かあったんだろうか。その時、僕の携帯が鳴った。どうやらメールではなく、電話のようだ。携帯のディスプレイを見ると武美さんからだった。

「はい。もしもし」

「学くん、ゴメン。少し遅れる」

「わかりました。気をつけて来てください」

「ありがとうございます」

通話を終えた僕は不思議な感覚に襲われていた。おかしい…明らかに武美さんの様子が昨日からおかしい。僕は武美さんのことが心配になりながらも、とりあえず今は仕事に集中することにした。結局、武美さんがバイトにやって来たのはバイト終了の5分前だった…。

第4話 おかしな様子（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

武美にも学にも悩みがあり、お互いの気持ちがあつかりだしています。この2人、これから一体どうなる…？

第5話も頑張りますのでよろしく願います！

第5話 一通のメール（前書き）

更新遅くなりました…すいません！

第5話目です。

様子が変わった武美は？ そんな字に…

第5話 一通のメール

「ゴメン。本当にゴメン」

バイトが終わって、いつも通り武美さんと帰っていると何度も『ゴメン』と言われた。僕自身は武美さんが遅れて来たことよりも昨日からの様子について聞きたいのだが…

「気にしないでいいですよ。僕も遅刻して武美さんに迷惑かけてますし」

「でも…」

「ほら、それにチーフも機嫌が良いのか、あまり怒ってなかったですし」

僕は必死だった。必死に話題を変えていこうとした。武美さんと話すのがこんなに緊張するなんて…多分、初めて話した時以来だろう。

「学くんは優しいね」

武美さんが突然そう言った。

「僕…ですか？」

「他に学くんってここにいる？」

「すみません」

僕がそう言うと武美さんは、まっすぐ前を向いて

「私ね…学くんのこと好きだよ」

と言った。僕は何が起きているのかわからず、動揺して何も言えなかった。

「学くんって何事にも一生懸命だし、優しいし…そういうところがすごく好き」

武美さんは僕の動揺なんて気にせず話を進める。

「昨日、お客さんと学くんが話しているところを見て、すごく辛かった。しかも幼なじみかもしれないなんて…」

幼なじみ…それは友美のことだ。昨日のお客さんが友美かはわからないが、友美に似ていたことは確かである。

「ねえ、学くん。私と幼なじみの子、学くんならどっちを選ぶ？」

武美さんにそう聞かれ、僕は困った。幼なじみで約束もしているが、連絡すらかない友美とバイトで一緒になって仲が良くなった武美さん。正直、どちらかを選ぶなんて出来る訳がなかった。

「僕は…」

「ダメ！ 選べないなんて言わないで！」

武美さんは、まるで僕の心がわかってるかのようにはっきりと言った。

「僕は…連絡もつかないし、行方もわからないけど…あの子が好きです。それに…あの子とは約束をしたんです」

「約束？」

「はい。正直、どんな約束をしたかはつきりとは覚えてません。でも、その約束は僕にとってもあの子にとっても…すごく大事な事だったはずなんです」

僕は、そう言って下を向いた。とてもじゃないけど、武美さんの目を見ることができなかった。その後、お互いの家に着くまで一言も話さなかった。

家に帰って来た僕は疲れが溜まっていたので寝ようと思った。学校の宿題があるが、優斗が見せてくれるだろう。しかし、なかなか寝付けない。目を閉じてても武美さんの言葉が思い出される。本当に僕の選択は正しかったのだろうか？ そんなことを考えていると寝るところか逆に目が覚めてしまった。

「はあ〜」

今日だけで一体、何回目のため息だろうか。自分でも嫌になってくる。その時、ふと携帯が目に入った。携帯を見るとメールが3通来ていた。1通目は優斗から。内容は宿題に関する事。明日も見せてくれるらしい。そろそろ自分で勉強しなきゃな…。2通目は武美さん。謝罪のメールだ。別に武美さんは悪いことをしたわけじゃ

ないんだから気にしなくていいのに…。3通目は…あれ？ 知らないメールアドレスだ。

「誰だろう？」

そう思いながら本文に目を通す。そこには…

「学くんへ

私が誰だかわかるかな？

<ヒント>

?あなたの友達です。

?あなたとたくさん遊んでいました。

?あなたの幼なじみです。』

僕は本文を読み終え、身体が震えた。間違いない…このメールは友美からだ。僕は「友美ちゃんなのか？」と返信した。すると…

「答えは明日の午後8時頃にわかるよ」

と返ってきた。午後8時…僕はバイトの時間だな。ということは、やっぱりあの友美に似ていたお客さんは…そんなことを考えながら僕は、いつの間にか寝てしまっていた。

ぐっすり眠り、起きると優斗からメールが来ていた。

『学、今日は学校休むのか？』

僕は、このメールの意味が全くわからなかった。僕は休むなんて言っていないのに…僕は近くにあった時計を見る。時計を見た僕は身も心も凍りそうになった。時計は…午後1時を指している。

「うわ！ 何でこんな時間!？」

僕は急いで準備をして学校へと向かった。僕が学校に着いた時には、すでに3講時目が始まっていた。講義中の教室に静かに入る。そして近くの空いている席に座った。しまったな…今日の午前中の講義は出席点がある講義だ。勉強やテストが苦手な僕にとって出席点は非常に大事である。それなのに…

「学、どうしたんだよ。何かあったのか？」

今日の講義が終わり、優斗がやってくる。

「いや…ちょっと寝坊してさ」

「今日の遅刻って寝坊どころのレベルじゃないぞ…」
「起きたら1時だった」

今日の遅刻については僕自身が一番驚いている。

「まあ、バイトと友美ちゃんのことを考えすぎて疲れてんだろ。無理せずゆっくり休めよ」

「うん。ありがとう」

「じゃあ帰るか」

僕と優斗は帰る準備をして学校から出た。

午後6時。僕は、いつも通りバイト。武美さんとは最初こそ少し気まづかったが、僕が話しかけると笑って話してくれた。今日のバイトは午後10時まで。そして午後8時、もしかしたら友美に会えるかもしれない。

「学くん、ちゃんと仕事してる？」

「すいません。大丈夫です」

レジから武美さんに喝を入れられる。いつもとは違い、なかなか仕事に集中できなかつた。僕は店にある時計を何回も見ている。早く8時になってほしい。ただそれだけだった。しかし、僕の気持ちとは裏腹に時計の針はゆっくりと時を刻んでいく。そんな中、僕はできるだけ仕事に集中することにした。時間は、すぐに進むわけではないが、仕事をしていけばいずれ8時になる。僕は8時になるまでじっと待った。

第5話 一通のメール（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

学に届いた一通のメール。はたして友美からなのか？ 午後8時を
気にして仕事にならない学に武美はどんなことを思うのか？

第6話もよろしく願います！

第6話 再会（前書き）

第6話目です！

学に届いたメール…はたして送ったのは？

第6話 再会

午後8時。店にあった時計がずっと待ち続けていた時間を指した。僕は武美さんに見つからないように店内から外を見渡す。しかし、外は誰も歩いていなかった。一体、これから何が起こるのか。友美と会えるのか。そう思うだけで緊張した。

「学くん、あがってもいいわよ」

そんなことを思っていると武美さんの口から信じられない言葉が僕の耳に飛び込んできた。

「えっ？ それってどういっ…」

「どうせ、幼なじみの子のことが気になって仕事に集中できてないんでしょ？」

「うっ…それは…」

しまった…武美さんにはバレバレだったか…

「それに…あなたを待っている人もいるみたいだしね」

そう言っつて武美さんは僕がさっき見ていた場所と逆の場所を指差す。そこには1人の女性がこつちを見ながら歩いていた。よくよく見ると手を振っているみたいだ。僕は何も言えなかった。

「ほら、バイトは大丈夫だから。チーフにも上手く言っつてあげるからさ」

「すみません。ありがとうございます」

僕は武美さんにそう告げて、制服を着たまま店の外へと出た。

「……バカ」

武美さんが何か呟いた気がしたが、僕は気にしないようにした。

僕は店の外で立っていた女性に走って駆け寄った。するとその女性
性は僕の顔を見て笑った。

「？」

僕はそれが何を意味しているのか全くわからなかった。

「あはは。ほんとに学くんだ」

その女性は、そう言った。僕は、ますます状況がわからなくなっ
た。

「ねえ、学くん。私のこと覚えてる？」

「友美ちゃん…だろ？」

半信半疑で答えた僕の心の中はドキドキだった。もし違ったら？
答えが返ってくるまで僕は苦しかった。

「学くん、そろそろ『ちゃん』はやめてよ」

「じゃあ、友美さん」

「『さん』も何かな。普通に『友美』がいいな」

僕は緊張で何も考えられなかった。まず、友美が目の前にいるということが信じられなかった。

「と…友美」

たった名前を呼ぶだけなのに人生で一番緊張した気がする。

「何？」

「今までどうしてたの？ 連絡先もわからなかったし…」

「ちよっとね。相変わらずお父さんの仕事関係で転々と…」

友美のお父さんは優秀でたくさん仕事を任されている。そのため、日本各地いろんな場所に派遣されているのだ。

「何で僕の連絡先わかったの？」

「あーえっと…」

友美は何か言いにくそうにしていた。隠したいことでもあるのだろうか。結局、

「内緒」

と言われた。この雰囲気壊したくなくて僕は、それ以上は追及しなかった。

「どれくらいここにいれるの?」

「うーん、学くとたくさん話したいから…1ヶ月はいたいな」

1ヶ月：長いようであつという間に過ぎていくだろう。あの時みたい
に1年とかいてくれればいいのに。

「ていうか、友美も僕のこと『くん』で呼んでるじゃん」

「細かいことは気にしない気にしない」

「何か不公平な気がする…まあいいけどさ」

僕の中でいつの間にか緊張は無くなっていった。僕と友美は時間を忘れてたくさん話した。それほど僕にとって、そしてきつと友美にとっても嬉しい再会だった。

第6話 再会（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

念願の友美との再会を果たした学。それを止められなかった武美。物語は動き出します。

第7話も頑張りますので、よろしくお願いします！

第7話 突然の…（前書き）

第7話です！

友美と再会した学はごく機嫌な様子。そんな中、バイト終わりに…

第7話 突然の…

友美と再会した僕は完全に浮かれていた。

「おい、学。どうしたんだよ。何でそんなに嬉しそうなんだ？」

優斗にこんなことを聞かれるほど浮かれていた。今日も友美と会う約束をしてある。バイトは午後5時から9時だから、終わったら会おうと。そんな浮かれている僕だが…

「学くん、今日はちゃんと仕事してよね…」

バイト先に着くと武美さんがすごい形相で僕を睨んだ。

「でも、昨日はいいって…」

僕がそう言つと…

「そついうわけじゃないの！ 学くんのバカ！」

と怒鳴られ足を思いつきり踏まれた。

「痛い痛い！ 早く足をよけてください！」

僕が何をしたって言うんだ…確かに仕事しなかったのは悪いけど…

「もう…とにかくちゃんと仕事して。わかった？」

「は…はい」

僕は返事をするだけでいっぱいだった。すごく武美さんは怒ってるみたいだけど、僕はそれだけ武美さんに酷いことをしてしまったのだろうか…。僕は仕事をしながら遠目で武美さんを見る。お客さんには、いつも通りの笑顔。僕には…

「何？」

「い…いえ、何でもありません…」

僕を見る度、武美さんから笑顔がスツと消える。さっきまで浮かれていた僕は武美さんの前では何も通用しなかった。今日のバイトは仕事をした気がしなかった…。

何とかバイトを終えた僕は帰る準備をして武美さんと目を合わせないように帰ろうと思った。

「学くん、ちょっと待ってて」

帰ろうとしていた僕の足が止まる。友美と会う約束の時間が迫っている。僕は早く帰りたいかった。でも、今日の武美さんをこれ以上怒らせたら…そんなことを考えているうちに武美さんがやってきた。

「帰りましょ」

武美さんの声は普段通りなのだが…今日の武美さんは僕にとって怒っているようにしか感じられなかった。

「……………」

帰り道、僕は何も考えずに武美さんの横を歩いていた。『余計な発言だけは避けよう』ただそれだけだった。

「ねえ、学くん」

僕があまりにも黙っていたからか、武美さんから話しかけてきた。

「何でしょうか？」

「目を閉じて、そこで立ち止まって」

武美さんが急にそう言った。僕は理由も聞かずにその通りにした。

「こっつ…ですか？」

「絶対に目を開けないでよ」

武美さんの言葉からわずか2・3秒。僕の唇に何かに触れた。僕は思わず目を開けてしまった。

「た…武美さん!？」

僕の唇に触れていたのは武美さんの唇だった。僕は何が起きたのかわからず、ただ困惑するだけだった。

「目、開けないでって言ったじゃん」

僕は、それどころじゃなかった。武美さんとキスをしたんだ…そんな現実を受け入れることができなかった。

「……………」

お互い話すことなく、しばらく立ち止まっていた。まるで時が止まったかのようだった。その頃、携帯にメールや電話が何件も入っているなんて気付かなかった。

第7話 突然の…（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

武美から突然キスをされ動揺する学。これからどうなる…？

第8話目もよろしくお願いします！

第8話 友美の家（前書き）

第8話目です！

武美からの突然のキスに戸惑う雪。お互い気まずい中…

第8話 友美の家

ようやく落ち着いてきた僕は今、起きたことを1つずつ思い出しながら確認をした。武美さんは僕に背を向け、遠くを見ていた。僕は、どうすればいいのかわからず、武美さんの背中を見ていた。その時だった。

「学くん！」

僕の後ろの方から聞き覚えのある声があった。僕は、ゆっくりと振り返る。そこには友美がいた。

「今、何時かわかってる？」

友美に言われ、携帯の時計を見る。時間は午後10時を過ぎていた。

「約束の時間は何時だった？」

「9時30分」

そうだった…すっかり時間を忘れていた。

「もう30分以上、待ってたんだよ？ メールにも電話にも気付いてくれないし…」

携帯を開いてみる。電話もメールも何件も入っていた。

「ごめん…」

僕は正直、それどころじゃなかった。武美さんのことが気になつて仕方なかった。武美さんの方を見ると武美さんの肩が小刻みに震えていた。

「あの…武美さん？」

僕が話しかけると武美さんは逃げるように走って行ってしまった。

「今の人は？」

「一緒にバイトをやっている人だよ」

「そうなんだ。ふん…」

友美は、そう言っつて何かを考え始めた。

「どうかした？」

「うん。私のライバルになるなって思っつてね」

「友美のライバル？」

「うん」

僕は友美の言っつていることがわからなかった。友美と武美さんつて初対面だよな…そんな風に思っつていると、

「学くんは気にしなくていいの」

と言われた。ますますわからなくなつてしまった。まあ、気にしなくていいつて言われたし、気にしないようにしよう。今は友美と一緒にいれるだけで十分だ。

「今日はどうしようか？」

「僕さ、友美の家に行きたいんだけど…ダメかな？」

「うん、ちょっと待ってて」

友美は携帯を取り出し、どこかに電話をし始めた。多分、お母さんとかだろう。

「大丈夫みたい。お母さんも久しぶりに会いたいわって」

「ありがとう。お礼言わなきゃ」

「そんなかしこまらなくてもいいのに……」

「小さい時にもたくさんお世話になったからさ」

友美のお母さんは、すごく優しい。僕のがままを何度聞いてもらったかわからない。友美が引越す時もそうだった。だからこそ、ちゃんとお礼をしたいと思いますって聞いていた。

「遅くなったら迷惑かけちゃうから行こうか」

「うん。多分、お母さんは何時でも学くんならいって言うと思うけど」

友美はそう言ったものの、僕はできるだけ迷惑をかけたくなかった。僕たちは友美の家に向かって、ゆっくり歩き出した。

歩き始めて約10分。友美の家に到着した。僕はすごく懐かしく感じた。

「どうぞ」

ドアを開けて、友美が言う。

「お母さん、ただいまー。学くんだよー」
「おじやまします」

中に入ると友美のお母さんがいた。なんと友美のお母さんは料理を用意してくれていた。そして僕を見て、

「学くん、久しぶりだね！」

と言って僕の手を握った。

「久しぶりです。まさか友美が帰ってきてるとは思いませんでした」
「たまたま仕事がかつちになつてね。友美ったら、学くんに会いた
いってうるさかったのよ」

友美のお母さんは、そう言って笑った。友美は顔を赤くして『もお！』と怒っていた。

「僕も友美と会いたかったので良かったです。それと今さらなんです
が…小さい頃からありがとうございます」

僕の言葉を聞いた友美のお母さんは驚いた顔をしていた。

「そんなこと気にしなくていいのよ。こちらこそ友美と仲良くして

くれてありがとう」

そう言われた僕は急に恥ずかしくなった。僕は恥ずかしさで何も
言えなかった。

「友美なんて小さい頃、毎日言ってたのよ。学くんのおよ…」
「ダメ!!!」

友美は何かを察知したのか、そう叫んで友美のお母さんの口を塞
いだ。顔は真っ赤になっている。僕は何が起きたのかわからず、ポ
カーンとしていた。

「学くん、気にしないで」

明らかにわかる作り笑いで僕を見る友美。その笑みが逆に怖かつ
た。

「まあ、とりあえずゆっくりしてって」

友美のお母さんはニコニコしていた。僕は今の状況がわからなか
った。

「まあ…いつか」

僕は、そう呟いて気にしないことにした。せつかく友美の家に来
ているのに細かいことを気にしていたら楽しい時間も楽しくなくな
る。結局、僕は友美と友美のお母さんの言葉に甘えさせてもらい、
一晩泊らせてもらえることになった。

第8話 友美の家（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

友美のお母さんが言いかけた『約束』。その内容は？

第9話もよろしく願います！

第9話 夜（前書き）

遅くなりましたが、第9話目です！
友美の家に泊まることになった学。そこで…

第9話 夜

「学くんは、こっちの部屋で寝て。友美の部屋は隣だから」
「すみません、ありがとございます」

僕のために友美のお母さんは部屋を用意してくれた。普段なら友美のお母さんが使っている部屋らしい。

「じゃあ学くん、おやすみなさい」

「はい。おやすみなさい」

僕はベッドに座りながら友美のお母さんに言った。それと同時にらいに今度は友美がやってきた。

「学くん、夜中にこっそりと私の部屋に侵入しないでよ」

友美は笑いながら僕にそう言った。友美は笑っていたが、冗談に聞こえなかった。

「侵入したら…どうなるの?」

「したいの?」

今度は真剣な目で僕を見る。「こっで『したい』なんて言ったら、一体どうなるのだろうか?」

「しないよ。僕にそんな勇気あると思う?」

「確かにね」

そうキツパリと言われるのも何か複雑なんだけどな…

「じゃあ、おやすみ。また明日」
「おう。おやすみ」

そう言っただけで友美は部屋を出ていった。隣の部屋の戸の閉まる音がした。遅い時間だったので僕も寝ようと部屋の電気を消した。

「……………」

シーンとなった部屋。僕は、なかなか眠れなかった。久しぶりに友美の家に泊まるということでの緊張はもちろん、壁一枚を挟んで向こう側に友美が寝ているのだ。僕は緊張しないわけがなかった。ふと、さっきの友美の言葉を思い出す。「夜中にこっそりと私の部屋に侵入しないでよ」ちよっとくらいなら…そんな気持ちで僕に生まれていた。でもいくら幼なじみとは言え、侵入は…そんな気持ちも生まれていた。そんなことを考えてしまい、余計に眠れなくなった僕。そんな時だった。

『ドンドン』

隣から急に壁を叩く音がした。僕はビククリしてベッドから落ちそうになった。

「も〜相変わらず学くんは臆病なんだから」
まるで僕の反応を見ていたかのように友美が言う。

「と…友美！ 驚かせるなよ！」

僕の反応に友美は大笑いしていた。笑われたことが何か悔しかった。

た。

「学くん、私の部屋に来たい？」

少しして笑いが治まった友美が言った。

「お前、何言つて……」

「だって、学くんには好きな人がいるんでしょ？」

「へっ？」

僕は友美の言ってることがよくわからなかった。僕が何も言わずにいると、

「アルバイト一緒の子だよ。さっきキスしてた子」

「!!!」

あの場面を友美は見ていたのか…確かに僕は、あの時キスをした。半ば武美さんが強引にしたようなものだが…。

「友美、あれは…」

僕は早く誤解を解こうと思った。しかし、上手く言葉が見つからない。

「私、学くんのが好きだった。ずっと好きだった」

今までに聞いたことが無いような友美の声。友美は泣いているのかもしれない。僕は胸が締め付けられているかのように痛かった。

「友美…そっち行っていい？」

「うん…」

僕は友美の部屋に静かに入った。友美はベッドから身を起こして座っていた。僕は友美の前に立ち止まって深々と頭を下げた。

「学くん…」

『ゴメン』という言葉すら言うことができなかった。僕はずっと片思いだと思っていた。友美が僕のことを好きになるわけがないと思っていた。だから友美が引越すことになった時、もう会えないと思った。何度も諦めた。無理だと思って諦めた。けど…諦めきれなかった。そんな時、僕は武美さんに出会った。それでも僕の気持ちは変わらなかった。武美さんに何をされても考えてしまうことは友美のことだった。僕の中から自然と涙が流れていた。友美を悲しませてしまった自分への怒り、友美の素直な気持ちに聞けた喜び、武美さんと中途半端な関係を持つてしまった申し訳なさ…僕の中にいろんな感情が湧いてきた。それが涙となって僕の中から流れていた。僕はしばらく、その場から動くことができなかった…。

第9話 夜（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

友美の気持ちがわかり、様々な気持ちが溢れている学。
そんな学を待っているのは…？

第10話もお願いします！

第10話 不安(前書き)

遅くなりました！
第10話です！

第10話 不安

友美の部屋に沈黙の空気が流れる。僕は友美の顔を見ることができなかつた。

「ねえ、学くん」

「何？」

僕がそう言うのと同時に友美は僕に抱きついた。

「友美？」

「もう離れたくない…ずっと学くんといいたい…」

友美のその言葉に止まっていた涙が再び流れ出した。こんなに僕を必要としてくれてる人なんて今までにいただろうか。そう考えると僕はすごく嬉しかった。

「友美…この1ヶ月間はずっと一緒にいよう。バイトが終わったら必ず友美のところに行く。約束だ」

「約…束」

友美は一瞬、驚いたような顔をした。僕にはどうしたのかわからなかつた。

「そろそろ寝ようか。時間もかなり遅いし」

「うん。おやすみ」

僕は友美の横に寝た。僕が寝ようとしていると僕の頬に何かがあった。

「学くん、大好き」

その言葉で触れたのは友美の唇だとわかった。

「ありがとう」

僕も友美の頬にキスをする。そうしながら僕と友美は眠りについた。

朝、目が覚めると一緒にいたはずの友美がいなかった。階段を降り、1階に行くと友美のお母さんがいた。

「学くん、おはよう。よく眠れた？」

「はい。おかげさまで疲れも取れました。本当にありがとうございます」

「いいのよ。毎日でも泊まってほしいわ」

言葉は嬉しいが、毎日となると友美のお母さんにいろいろと迷惑をかけてしまう。

「そう言えば…友美はどこにいるんですか？」

「友美ならキッチンにいるわよ」

友美のお母さんはそう言って、ニコツと笑う。僕はキッチンへと向かった。

「友美、おはよう」

「あつ学くん。おはよう」

「何してるの？」

「えっとね、今日はせつかくだからと思って…」

友美はそう言いながら弁当箱のふたを閉めた。そして、その弁当箱を僕の手に乗せた。

「これ…」

「私が作ったんだ。味は保証できないけど」

友美は先に起きて僕の弁当を作ってくれていた。嬉しくて涙が出そうだった。

「ありがとう」

「朝ごはんも作ったから食べて」

僕は友美の作ってくれた朝ごはんを食べて学校に行く準備をした。友美の作ってくれた朝ごはんはすごく美味しかった。朝ごはんを食べたばかりなのにすぐにでもお昼の弁当を開けたいと思うほどだ。そんな友美の作ってくれた弁当をカバンに入れ、学校へ行く準備が終わった。そして…

「本当にありがとうございました」

あっという間に時間は過ぎ、学校に行く時間になった。僕は友美

の家の玄関で改めて友美のお母さんに深くお礼をした。

「また泊まりに来てね」

「はい。その時はよろしくお願いします」

「学くん、約束…守ってよ！」

そろそろ行くころかと思っていた時、友美が走って玄関にやってきた。友美のお母さんは気を遣ってくれたのか、静かにリビングへ戻った。

「大丈夫。ちゃんと守るよ」

僕が笑ってそう言っていると、友美も笑って頷いた。

「じゃあ、いつてきます」

「うん。いつてらっしゃい！」

僕は本当は友美の家から出たくなかった。何か嫌な予感がした。もう会えない、そんな風に思った。

学校の昼休み。僕はいつも通り優斗とご飯を食べていた。ただ、

いつもと違うことが1つある。

「学、お前の弁当……」

優斗が驚くのも無理はない。今日の弁当は僕の両親が作ったのではない。友美が作ってくれたのだ。

「別に普通だけど？」

そう言ったものの、僕は心の中で喜びながら弁当を口にする。優斗を見ると何故か笑っていた。

「どうかした？」

「いや、学にも春が来たかと思ってね」

「何言ってるんだよ。いつもと変わらないって」

「最近の学の様子もおかしいしな」

何となく予想はしていたが、本当にイジられるとは……

「ほら、のんびりしてたら昼休み終わるよ？」

「はいはい」

僕は強引にこの話を終わらせようとした。相変わらず優斗はニヤニヤしている。でも優斗には「友美と会った」なんて言えなかった。言ったら……優斗が離れていってしまう気がした。どうしてこう思うのかは自分でもわからない。けど、ただ単純にそう思った。

午後5時。今日のバイトが始まった。武美さんとは挨拶を交わしただけで何も話さなかった。バイト中は、まるで時間が止まっているかのように長く感じた。

「お疲れ様でした」

何とかバイトを終えた僕は、すぐに友美との待ち合わせ場所に向かった。待ち合わせ場所に着いたのは約束の時間の10分前だった。

「さすがにまだ来てないよな」

僕は近くにあったベンチに座って待つことにした。しかし、約束の時間になっても友美が来ない。約束に遅れることなんてほとんどないのだが…僕は、とりあえずあと10分待つてみることにした。

「遅いな〜…」

10分経っても友美は来なかった。朝、友美と別れる時に感じた嫌な予感…僕は友美のことが心配になり、何度も電話をかけた。しかし、僕の耳に届いてくるのは無情にも呼び出し音だけだった。

「何で…」

約束の時間から1時間が経とうとしている。電話は呼び出し音の

み。友美が来る気配すらない。僕の頭の中はパニック状態だった。
『嫌い』『もう会いたくない』そんな言葉が聞こえてきそうだった。
そう考えると急に怖くなった。そして、気がつけば僕は走り出して
いた。何も考えず、ただその場から逃げ出したかった。

第10話 不安（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

友美が来ない…一体何が？

不安に襲われる学…はたして友美はどこに…？

第11話もお願いします！

第11話 本性(前書き)

第11話です！

友美の行方はどこ…？

第11話 本性

どのくらい走っただろうか。僕は街外れの路上を歩いていた。携帯を開く。メールも電話も来ていない。そのことが僕の不安を煽った。そんな時だった。携帯が鳴った。どうやら電話のようだ。

「もしもし？」

「学くん、友美は!？」

僕が出ると同時に叫び声が出た。電話の相手は友美のお母さんだ。

「わからないです…僕も会ってません」

「会ってませんって…」

僕は全てを友美のお母さんに話した。話しながら僕は泣いていた。

「そうだったの…わかったわ。何かあったら連絡ちょうだい」

「はい…すみません」

そう言っただけで電話を切る。僕は変な脱力感を感じた。『どうでもいい』そんな言葉が思い浮かんだ。僕は力なく歩き出す。家に帰ろうと思った。歩いていると再び携帯が鳴った。また電話のようだ。

「もしもし？」

「学、今すぐ俺の家に来い。わかったな」

「えっ？ 優斗？」

電話の相手は優斗だった。しかし、優斗は要件を伝えるとすぐに電話を切った。何があったと言うのだろうか。こんな遅い時間に優

斗が僕に用事って…僕は何もわからなかったが、とりあえず優斗の家に行くことにした。

優斗の家に到着した頃には午後11時を回っていた。優斗は一人暮らしなので、この時間でも問題は無いのだろうが…詳しい要件もわからないまま来た僕は不思議に思いながらもインターホンを押した。

「学か。入れよ」

機嫌が悪いのか優斗はいつものような口調ではない。僕はゆっくりドアを開けた。中は真っ暗で一部屋だけ電気が点いていた。あまりの不気味さに僕は身震いをした。

「優斗？」

「学、まあ部屋に来いよ」

優斗に言われ、部屋へと入る。そこで僕が見たのは…

「なっ…!!」

言葉が出てこなかった。部屋にいたのは優斗だけではなかった。

「くんばんは」

僕を見た途端にニコツと笑う。何故かわからないが武美さんがいる。さらに床には、ぐったりとして寝ている友美がいた。

「優斗！ どういうことだよ！」

状況を徐々に把握して落ち着いてきた僕は怒鳴っていた。

「どういうことも何も…お前は俺に黙って友美と会ってたんだな」

「それがどうしたって言うんだよ！」

「武美さんとキスをしておきながら、友美の家でお泊りってか。お前は幸せな奴だな」

「お前、何でそんなこと…」

そう言いながら、武美さんを見る。僕は何故、優斗が知っているのかがわかった。

「学くん、なんか間抜けな顔をしてるよ？」

笑いながら武美さん…いや、武美が言う。こんな人に『さん』を付ける必要なんてない。

「優斗、武美…お前ら友美に何をした？」

「何をしたってね」

2人はお互いの顔を見て笑いだした。僕は何が可笑しいのかわからず、今にでも殴りかかりたくなった。

「笑い事じゃないだろ！ 何をしたって聞いてるんだよ！」

「おー怖い怖い」

そう言っただけで急に2人は笑うのをやめて僕を睨んだ。

「お前も友美も邪魔なんだよ」

どこから出しているのか疑いほど低い優斗の声。その眼差しと声から冗談ではなさそうだった。

「邪魔ってどういうことだよ」

「そのまんまの意味さ。俺にとったら、友美を奪うためにお前が邪魔だ。武美さんにとったら、お前と付き合ったために友美が邪魔」

「……………」

呆気に取られて何も言えなかった。そして後悔した。あの時、素直に優斗に『友美と会った』と言えばこんなことにならなかったかもしれない。

「てことでさ、お前は向こうで武美さんと遊んでるよ。俺は友美と遊ぶからさ」

「もう、やめろよ……」

「はっ？」

「友美…ぐったりしてんだろ。もう、やめろよ……」

スツと僕の全身から力が抜けていくのがわかった。ぐったりとした友美を見て僕は、立っていられなかった。優斗や武美の笑い声があるが、そんなのどうでもよかった。悪夢なら覚めてくれ、そう思うしかなかった。

第11話 本性（後書き）

読んでくださってありがとうございます！
優斗と武美の本性が…

第12話もよろしく願います！

第12話 気持ち（前書き）

第12話目です！

優斗と武美の復讐を受ける学と友美。

二人はいつたいていどうなってしまうのか…？

第12話 気持ち

「ほら、もうお前らに用無いから」

あれからどれくらいの間が経っただろうか。結局、僕と友美は散々遊ばれて、捨てられるように優斗の家から追い出された。追い出されてから、これは現実なんだと感じた。とりあえず僕はぐったりしている友美を抱えて、友美の家に向かうことにした。

友美の家に着くと友美のお母さんは何も言わずに僕と友美を中に入れてくれた。僕はシャワーを浴びさせてもらった。

「学くん、一体どうしたの？」

僕は友美のお母さんの顔を見ることができなかった。僕のせいで友美は傷ついた。僕のせいで…

「黙ってたら、何もわからないじゃない。きっと学くんは優しいから、全て自分のせいって思ってるだろうけど、私はそうは思わないな」

「ごめんなさい」

「私は学くと友美のことを小さな頃からずっと見守ってきた。私はね、学くんなら友美の心の支えになれると思うんだ。だから…」

友美のお母さんの目からは涙が流れていた。僕は申し訳ない気持ちでいっぱいだっただ。そんな時だった。

「うーん、学くん…？」

友美が目を覚ました。僕は泣きながら友美に抱きついた。

「友美、ゴメン…」

僕は何回も何回も数えきれないほど謝った。きっと何度謝っても僕の心、そして友美の心から消えないと思う。けど、今の僕には謝ることしかできなかった。

「学くん…そんなに謝らないですよ」

「だって、僕は…僕は…」

泣いているため言葉が続かない。自分で何を言っているのかもわからなくなってきた。

「学くんのせいじゃないよ。私が悪いんだ」

友美から予想外の言葉が出てきた。友美は悪いことなんてないはず…僕が黙っていると、

「学くんは武美さんのことが好きなんですよ？」

「えっ？」

また予想外の言葉が友美の口から飛び出す。

「私、聞いちゃったんだ…。学くんは武美さんと付き合ってるんだよね？」

「!?!」

僕は金縛りにあったかのように動けなくなった。僕と武美が付き合ってるって!?

「それなのに私は学くんと会って、だから…」

友美の言葉が1つずつ胸に突き刺さる。苦しくて息をしていることすら忘れるほどだった。

「僕は…」

やっとのことで僕は声を出す。

「僕は、友美のことが好きだ。武美とは付き合っていない」

言いきって、やっと現実に戻って来た気がした。

「そうなんだ。じゃあ…」

友美が何か言いかけた時だった。

「はい、そこまで。もう時間も遅いんだから、ゆっくり寝て休みなさい」

友美のお母さんが止めに入った。僕は少しホツとした。このまま

だと僕と友美の関係が悪化するだけだ。

「学くんは友美と寝てあげて」

友美のお母さんがこっそりと僕の耳元で言う。僕は静かに頷いた。

「じゃあ、寝よっか…」

少し寂しそうに友美が言う。時計の針は4時を回っていた。

僕はその後、友美と一緒に寝た。最初は拒否されると思っていたのだが…。ベッドに入った瞬間に僕も友美も一気に眠りに就いた。そして…

「おは…じゃなくて、こんにちは」

僕が起きると時間は午後2時だった。幸い今日は土曜日。学校もなく、ゆっくり過ごせる日だった。僕の両親には友美のお母さんから伝えてくれたみたいだ。肝心の友美はと言うと…

「学くん、よく寝たね」。まさか2時まで寝てるとは…」

僕を見つけるなり、友美は笑顔で言った。「元気そうに見えるのだが…」

「友美、大丈夫か？」

「何が？」

僕の心配をよそに友美は満面の笑みでそう言う。

「いや、友美が大丈夫ならいいんだ」

「？」

不思議そうに僕を見る友美。僕の気にしすぎ…そう思って僕は気にしないことにした。

第12話 気持ち（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

学の心配…元気な友美…対照的な二人。これからどうなっていくて
しまうのか？

第13話目も頑張りますのでよろしくお願いします！

第13話 悲劇（前書き）

第13話目です。

元気に見える友美だが…

第13話 悲劇

友美に別れを告げ、家に戻ってきた僕を待っていたのは説教だった。友美のお母さんから事情を聞いていたうちの両親は僕の顔を見るなり説教を始めた。そして、たつぷり説教を受けた僕は自分の部屋へと入り、自分の頭の中を整理していた。友美は本当に大丈夫なのだろうか、優斗と武美は僕たちへの恨みが溜まっていたとはいえ、何故このような復讐をしたのだろうか。考えれば考えるほど疑問ばかりが僕の頭を埋めていく。

「はあ〜」

出てくるのはため息ばかり…。そして底知れぬ不安に僕は襲われた。優斗と武美の復讐はきつとまだ終わらないだろう。友美と会わない方がいいのではないか、そう思った。

『ブーブー』

僕の不安を感じ取ったのかマナーモードにしたままの僕の携帯電話が鳴った。

「誰だろう?」

そう思って僕は携帯電話を手取る。友美からの電話だった。

「もしもし? 友美、どうした?」

「……………」

電話からは何の返答も無かった。一体、何が起きているのだろうか

か。

「…ぐすっ」

耳を澄ますと、かすかに音が聞こえる。どうやら友美は泣いているみたいだ。

「友美、何かあったのか!? 今、どこにいる!?!」

「公園…」

「わかった! すぐに行くから待ってる!」

僕は不安を感じずにはいられなかった。ただ…今は一刻も早く友美の場所へ、そう思いながら僕は公園へと走り出した。僕は無我夢中だった。友美の行く公園といえば1ヶ所だけ思い当たる場所がある。

「友美…」

僕は公園に到着すると同時に友美の名前を叫んだ。返答は無いが、ここにいるはずだ。ここは僕と友美がよく遊んでいた場所だから。

「友美…」

名前を叫びながら僕は公園を走り回った。しかし、どこを探しても友美はいない。ここにはいないのか。それともまたあの二人に巻き込まれて…嫌な想像が頭をよぎる。その時だった。

『ガサガサッ』

草むらから何か音がした。

「と…友美か？」

僕はゆっくりと草むらに近づいた。そこにいたのは…大泣きしている友美だった。声は押し殺してるものの涙が流れ続けている。

「友美…」

僕はその場に立ち尽くすことしか出来なかった。

それからどれくらい経っただろうか。僕は友美の隣に座り、頭を撫でていた。何も話すことのない、重たい空気…僕は経験したことのない気まずさを感じていた。

「…学くん」

先に口を開いたのは友美の方だった。さっきまで泣いていたせいか、目が赤く腫れている。

「何？」

「私…怖い…」

僕はその言葉に何も反応できなかった。

「私…学くと会わない方がいいのかもね」

僕も友美と同じことを少し考えていただけに何も言えなかった。

「じゃあね、学くん」

友美は僕の答えを待つことなく、強引に話を終えた。そして走って公園から出て行こうとする…その時だった。

「おい！ 友美待て！」

公園から出た先の道路を一台の車がこっちに向かって走っていた。このままでは友美は…

「友美！」

僕の叫びは青い空へと消えていくばかり。友美には届いていない。そして…

『キキーツ』

車の急ブレーキの音がした。それと同時に…

『ドンツ』

僕はゆっくり目を開ける。そこには…横たわっている友美と車を運転していた男女がいた。僕はゆっくり近づいていった。

「友美…」

何の運命か、車に乗っていたのは優斗と武美だった。二人は近づく僕に何度も謝った。僕は二人を無視して友美のところへ向かった。友美は静かに寝ているかのようなだった。傷は一つもなく、血も出ていない。しかし、友美に意識は無かった…。

事故から15分。救急車と警察の事故処理班が到着した。すぐに友美は救急車で病院へと搬送された。優斗と武美は事情聴取のため警察署へパトカーに乗っていった。友美のお母さんは警察からの連絡で病院へと向かった。僕は一人、公園のベンチに座っていた。どうしてあの時、僕は友美を止められなかったのか…それだけが後悔として残っていた。僕は頭を整理しようと目を閉じた。しかし、僕の脳裏に事故の光景がはつきりと焼き付いていた。僕はどうしてもいいのかわからず、ただ公園のベンチに座っていることしかできなかった。

第13話 悲劇（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

友美の事故…学には予想外の出来事…様々なことが起きる中、
14
話では…

第14話目も頑張りますのでよろしくお願いします！

第14話 友美の記憶（前書き）

第14話目です。

病院に運ばれた友美。まだ事実を受け入れることができない学に待っていることは…？

第14話 友美の記憶

いつの間にか辺りはすっかり暗闇に包まれていた。あれから僕はベンチに座り、ずっと事故現場を眺めていた。

「学くん……」

突然、僕の後方から声がした。僕はゆっくりと振り返る。そこには友美のお母さんが立っていた。僕は深く頭を下げた。

「学くん、顔を上げて」

友美のお母さんはそう言ったが、僕は頭を上げることが出来なかった。何か嫌な予感がした。

「学くん、あのね……友美に会ってほしいの」

友美のお母さんの話だと友美は意識を取り戻したらしい。しかし……

「友美は……友美の記憶は……」

友美は記憶を失っているのだという。僕は倒れそうになった。

「だから……友美に会って」

「はい……」

僕はそう言って、静かに頷いた。そして友美のお母さんと共に病院へと向かった。

病院に着くと、

「学くん、行って来て」

友美のお母さんに背中をポンと押された。友美のお母さんは疲れきってる様子だった。娘が記憶を失っているかもしれないのだ…行きたくないと思うのは当然だろう。僕は静かに友美の待つ病室へと向かった。病室の前に立つと未だに現実なのか夢なのかわからなかった。どうか夢であってほしい、何度もそう願った。

「……………」

ゆっくりドアノブに手をかける。僕は静かにドアを開けた。4人部屋の右奥。僕は緊張と不安で震える足を必死に動かし、友美のもとへと向かった。

「…友美」

自分でも聞こえるかどうかわからない声で僕は呟いた。友美は僕に気がついたのか、ゆっくりと身体を起こした。

「…どちら様ですか？」

友美の一言目。僕は耳を疑った。嘘だろ…友美は本当に記憶を失っている…そんなこと受け入れたくなかった。きつと友美は僕に心配をかけたくないから、こんな冗談を言っているんだ…僕はそう考えた。

「友美、僕だよ。学だよ」

僕は笑いながら言った。

「まな…ぶ？」

友美は不思議そうに僕を見ている。僕は息が詰まりそうになった。

「お…おい、友美。冗談はよせよ」

僕は友美の頭に手を乗せて言った。その時だった。

「ちょっと！いきなり何するんですか!？」

友美はそう怒鳴って僕の手を払った。僕はいきなりのことにあ然とするしかなかった。

「出て行ってください」

僕は病室から追い出されてしまった。友美は本当に記憶を失っている…。僕は現実を受け入れるしかなかった。

「だから俺は反対だったんだよ！」

僕の後方から怒鳴り声がした。僕は恐る恐る後ろを見た。そこには友美の両親がいた。怒鳴ったのは友美のお父さんだ。僕はただ黙って見ているしかなかった。そんな僕に気づいたのか、友美のお父さんは僕を睨みつけた。怒りに満ち溢れた眼差し…。

「友美…」

しばらくして友美のお父さんは膝から崩れ落ちた。僕は苦しかった。逃げ出したかった。

「学くん、今日は帰って。疲れたでしょ？」

友美のお母さんの言葉に僕は静かに頷いた。友美のことは心配だが、今の僕は何もできない。僕は友美の両親に深く礼をして、病院から出た。

家に帰ってきた僕はまるで魂が抜けたような状態だった。生きている気がしない…そう感じた。僕はただ窓を眺めていた。僕には窓の外の景色さえ、現実のものなのかわからなかった。涙が頬を伝う…友美が記憶を失ってしまったこと友美の両親、自分の両親に迷

惑をかけたこと…全ての責任が自分にある気がした。

「何でこうなるんだよ…」

僕は何も考えずに窓を開けた。ここから飛び降りれば僕は楽になれるんだろうか…しかし、僕には飛び降りる勇気なんてなかった。

僕は窓を静かに閉じて、冷静に考えた。僕が今できること…

「明日も友美のところに行こう」

僕は毎日、友美に会いに行くことにした。自分のため、そして友美の記憶を取り戻すため…僕は心の中でそう決意して眠りに就いた。

第14話 友美の記憶（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

記憶を失った友美：決意をした学：2人の運命は？

学は友美の記憶を取り戻せるのか？

第15話目も頑張りますのでよろしくお願いします！

第15話 僕の心（前書き）

第15話目です！

少し更新が遅れてすいません…
また1週間に1話のペースに戻せるように頑張ります！

第15話 僕の心

「あなた誰？」

静かに僕に言う女の子。女の子の姿は見えず、誰だかわからない。友美なのか？

「僕は…」

僕が言おうとした時だった。

「言わないで！ 私はあなたのことを思い出したくないの！」

僕にはこの言葉が胸に突き刺さった。苦しい…辛い…悲しい…怒り…いろんな感情が僕の中で生まれていった。そして…

「うわああああ！」

絶望感から僕は叫び出していた。

『ジリリリリ』

目覚まし時計が鳴る音がした。僕はゆっくりと身体を起こす。目を開けるといつも通りの自分の部屋があった。

「夢…か」

それにしても嫌な夢を見たものだ。誰かわからない女の子に『思い出したくない』なんて言われるんだから、僕はきつとその女の子

に相当嫌われていたのだろう…。もしあの女の子が友美だったら…
そう考えると震えが止まらなかった。

「よし、今日も頑張るか！」

僕は今日の夢のことを気にしないことにした。きっと僕も疲れて
いるんだ。そう言い聞かせながら僕は大学へと向かった。

大学に着くと僕は急に寂しい気持ちになった。それは優斗がいな
いからだ。優斗は昨日、退学届けを大学に提出した。僕はそれを今
朝、メールで知った。メールの最後には『ゴメン』と書かれていた。
僕はこのメールを見た時、複雑な気持ちになった。確かに優斗と武
美がやったことは許せない。けど…結果的に僕は優斗という大切な
友達を失うことになった。講義を受けながら何度もいつも優斗の座
っていた席を見つめた。数日前まで優斗は元気に僕と話していたの
だ…それなのに、たったこの数日で僕との関係は儚くも散ってしま
った。胸が苦しかった。痛かった。息をするのもやっとの状態だっ
た。そんな苦しみに耐えながら、僕は講義を受けた。

「はあ、はあ、はあ…」

講義が終わり、大学から出た僕は息切れ寸前だった。大学から出た瞬間に涙が溢れ出た。単に悲しいだけの涙じゃない…この涙にはいろんな感情が含まれている。

「優斗…バカだよ…」

僕はしばらく動けなかった。気持ちを整理するのに時間がかかった。

『ブーブー』

僕の携帯電話が鳴っていた。最初は無視していたが、僕は電話に出た。

「もしもし？」

「あ、学くん？」

電話は友美のお母さんからだ。また何かあったのだろうか。僕は思わず電話を切りそうになった。

「友美が学くんに会いたって」

僕は友美のお母さんからの予想外な言葉に腰が抜けそうだった。

「えっ？ でも友美は僕のことを覚えてないんじゃない？」

僕は困惑しているのを隠せなかった。昨日の様子からしても友美は僕のことを覚えてはいない…それなのに今日は会いたかったって？僕は状況が掴めなかった。

「とにかく病院に来て」

「わかりました」

僕は電話を切り、不思議に思いながらも病院へと向かうことにした。

病院に着くと、すぐに友美のお母さんが迎えてくれた。友美の様態は安定していて、今日は脳の検査をしたらしい。脳には異常は無く、担当の医師によると記憶を失っているのは一時的で原因としては事故に遭ったことと最近の過度なストレスということだった。まだ友美は全てを思い出したわけじゃないが、断片的に記憶が戻ってきてるらしい。

「学くんのは、なかなか思い出せないみたい」

そこで直接会った方がいいんじゃないか、と友美のお母さんは考えたみたいだ。僕は友美のお母さんと数分話し、友美の病室へと向かった。病室の前に立つと昨日のことが呼び起こされた。今日も昨

日のようになったらどうしよう…不安を抱えながら僕は病室へ入った。

「友美」

今日の友美は待つてましたというかのようによくに身体を起こした。

「学くん、昨日はごめんなさい」

急に謝られた僕は何かおかしくて笑ってしまった。これがいつもの友美だ。僕は何か嬉しかった。

「何で笑ってるの？」

「何でもないよ」

そう言いながら僕は笑いが止まらなかった。

「もう笑わないでよ」

友美も一緒に笑っていた。僕は今なら嫌なことを全て忘れられる気がした。

「友美、ゴメンな」

「ん？ 何で学くんが謝ってるの？」

「いや…ちよつとな」

友美は何も言わずに笑顔で僕を見ていた。そして僕の頭を撫でながら、

「私は何が起こったのか今はわからないよ。でも、学くんがそこま
で気にする必要あるのかな？ 私は気にしなくていいと思うな」

友美の言葉に今まで堪えてきた僕の心が音を立てて割れた気がし
た。涙が今にも出そうだった。

「学くん？」

心配そうに僕を見る友美。友美は少しして笑顔で、

「学くん、泣きたい時は思いっきり泣いていいんだよ？」

と言った。僕の心は限界だった。涙が止まらなかった。今まで流
してきた涙とは違う、温かな涙だった。

第15話 僕の心（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

学の心はかなり苦しいだろうな…

そんな心を救った友美。しかし、友美には記憶がほとんど無い…

そんな中、物語は再び少しずつ動き出します…

第16話 大切な記憶（前書き）

第16話目です！

友美に救われた学。

そんな時、学は友美のある言葉に何かを感じる…

第16話 大切な記憶

僕はどれくらい泣いていたのだろうか。涙が止まった時にはすでに病院の夕食の時間だった。

「学くん、大丈夫？」

友美は何も言わずにずっと僕の頭を撫でてくれた。僕にとってそれはすごく心強かった。そばに友美がいて支えてくれる、そう思うだけで僕の心は晴れていった。

「うん。大丈夫。心配かけてゴメン」

「ううん。学くんが元気になってくれたならいいんだ」

友美の優しい言葉に僕の涙腺がまた緩む。今の僕はちょっとしたことで泣いてしまいそうだった。

「もうこんな時間だね」

「そうだね。僕、そろそろ帰らなきゃ」

時間とはあつという間のものだ。まだ来たばかりという感覚だった。

「学くん、明日も来てくれる？」

あれ？ この友美の言葉…どこかで聞いたことがある気がする…

「うん。絶対に来るよ」

「ありがとう！」

僕はそう言って、友美に手を振って病室から出た。ある一つの疑問を抱えながら…

家に帰って来た僕は自分の部屋でさっきの友美の言葉を思い出していた。今日、唯一気になったこと…『学くん、明日も来てくれる？』という言葉…何も変なところは無いのだが、僕にとってはこの言葉が何か大切な意味を持つ気がした。遠い昔の記憶の中で僕は何か大切なものを忘れている気がする…。

「はあ〜」

思わず僕の口からため息が出た。大事なことが思い出せず、僕はもどかしさを感じた。友美と出会ったのは小学生の時。よく一緒に遊んでいた。しかし、小学校を卒業すると同時に友美はお父さんの仕事の関係で引っ越すことになった。その時に何かを約束したはずなのだ…その約束を僕は覚えてない…。覚えていないというか思い出せないのだ。不思議なことにそこだけ記憶が抜けているのだ…。

「あ〜！ くそっ!」

僕は思わず壁を蹴った。思い出せない悔しさと自分の情けなさを感じた。

「約束…か」

とりあえず今は考えないことにしよう。友美の記憶も徐々に戻っていくはずだし、きっとそのうち何かわかるだろう。

翌日、僕はいつも通り大学で講義を受け、病院へと向かった。友美に講義を休んで行くと言うと、厳しく叱られた。ちゃんと講義を受けなさいって…。病院に到着した僕はすぐに友美の病室へと向かった。中に入ると友美はすやすやと寝ていた。

「可愛い寝顔だな」

僕は思わず友美の寝顔に見とれていた。起こしては悪いので友美が起きるまで待つことにした。それにしてもここ数日はいろんなことが起こりすぎて疲れた。まだ全てを受け入れることが出来たわけではない。けど…変わらないことがある。僕は友美のことが好きだ

ということ…これだけは何があっても変わらない。そんなことを考えていると疲れているせいか眠たくなってきた。少し僕も寝ようかな…そう思って僕は目を閉じた。

「学くん、さようなら」

友美…？ 何、言ってるんだよ…僕はそう思って声を出そうとした。しかし、僕の口からは声が出てこない。その間に友美は、どんどん僕から離れていく。こんなの嫌だ…今の僕は思っても声に出すことができないため、友美を止めれない。距離は離れていくばかりだ…。僕は泣き出していた。その時だった。

「学くん！」

…？ 僕はゆっくり目を開けた。

「あれ…友美？」

目の前には友美が立っていた。さっきまであんなに距離があったのに…

「学くん、かなりうなされてたけど…大丈夫？」

「あ…そうか、あれは夢か…」

夢…だったのか。僕はホツとした。目の前に友美がいてくれることが僕にとって、どれだけ大切なことなのかを改めて感じた。

「変な夢でも見たの？」

「うん。最近、変な夢をよく見るんだ…」

そう…疲れているせいだと思うが、変な夢を見ることが多い。誰かが僕から離れていく夢…

「どんな夢なの？」

何も知らない友美は笑顔で言う。今の僕にとっては友美の笑顔が悪魔の笑顔に見えた。

「内緒だよ。とても言えることじゃないから」

「えーいいじゃん。教えてよ」

「ダメって言ったらダメなの」

「教えて」

「ダメ」

しばらくの間、こんなやり取りが続いた。何かバカバカしいやり取りだったけど、それがまた楽しかった。

「友美ってさ、面白いよな」

「それはバカにしてるの？」

何気ない友美との日常会話。この様子だけ見たら、とてもじゃないが友美が記憶を失っているなんて信じられなかった。こんな楽しい時間がいつまでも続けばいいのに、そう僕は思った。

第16話 大切な記憶（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

友美の『明日も来てくれる？』という言葉…この言葉に何の意味があるのか…？

第17話では意外な展開が学を待っています。

第17話目も頑張りますのでよろしくお願いします！

第17話 最後の言葉(前書き)

更新が遅れちゃいました…:すみません!

第17話目です!

ここから話は思わぬ方向へ…

第17話 最後の言葉

楽しい時間というのはあっという間である。友美と話していると時間はどんどん過ぎ去っていった。

「じゃあ、また明日な」

「うん！」

友美と過ごすことができる数時間。僕は幸せだった。

「学くん」

病室を出た僕を待っていたのは友美のお母さんだった。相変わらず友美のお母さんは疲れているようだった。きっと友美のことが心配で寝れない日もあるのだろう。

「友美…元気だった？」

「はい。元気でしたけど…どうかしました？」

僕は少し戸惑った。いつも一緒にいて、友美のことを一番わかっているはずの友美のお母さんが僕に「友美…元気だった？」って…僕にはよくわからなかった。

「ううん。気にしないで」

明らかに今日の友美のお母さんの様子はいつもと違った。何か哀しげな目…何かを抱えながら、苦しんでいるように思えた。

「あの…僕で良かったら、話聞きますよ？」

こんな状態の友美のお母さんを放っておくことは僕には出来なかった。それに今まで友美のお母さんに僕はたくさん助けてもらった。だから…今度は僕が助けたい、そう思った。

「うん。ありがとう」

友美のお母さんは僕の言葉に対して、それだけを言ったただけでも話してはくれなかった。僕と友美のお母さんとの間には何とも言えない嫌な空気が流れていた。

「じゃあ、僕は帰ります」

僕はこの重たい空気に耐えられず、帰ることにした。友美のお母さんは何も言わず礼をしただけだった。

また気になることが1つ増えた。日に日に気になることが増えていく。僕には今、何が起きていて、何をしなければならないのかわからなかった。日に日に募る不安…僕の今やっていることは正しいのだろうか、何度もそう思った。

『プルルル』

家の電話が鳴っている。今は家に僕しかない。僕は仕方なく電話に出た。

「もしもし？」

「…学か？」

その声を聞いて僕はビックリした。電話の主は優斗だったのだ。

「ゆ…優斗。どうしたの？」

僕は動揺する心を必死に抑えようとした。しかし、声が震えているのが自分でもわかった。

「学…落ち着いて聞いてくれ。俺はもうダメだ…」

動揺している僕をよそに優斗は話し始める。

「優斗…？ 何かあったの？」

よく聞いていると優斗の息は切れそうになっている。さっきの言葉といい、優斗に何かが起きているのかもしれない。かなり危険な状況のようだ。

「時間が無い。学、友美を頼んだぞ…絶対に友美を守れよ…わかったな？」

「ちよっ…優斗！？」

そこで電話は切れた。何度も受話器を耳に当てたが、聞こえてくるのは『ツーツー』という虚しい音だけだった。優斗の最後の言葉『学、友美を頼んだぞ…絶対に友美を守れよ…』一体、優斗に何が

起きているのか、この言葉には優斗のどんな気持ちがあるのか…僕には何もわからなかった。

電話で優斗と話してから3時間くらいが経っただろうか。僕の家
に警察から電話がかかってきた。

「中山優斗さんは先程…」

警察から聞いた話が僕にはとても信じられなかった。優斗は河原
で遺体として発見されたらしい。頭から血が流れていて、身体中に
傷があったという…警察は鈍器による他殺として調べているとのこ
とだった。優斗の携帯の最後の発信が僕の家だったため、電話をし
たそうだった。

「すみませんが警察署まで同行をお願いします」

警察からの電話から約15分。僕の家には1台のパトカーと2人の
警察官がやってきた。

「はい。わかりました…」

僕は静かに頷いて、パトカーへと乗った。警察署に着く前から僕
への質問は始まった。

「中山優斗さんとは仲が良かったんですか？」

「はい…仲良しでした」

「あなたは今日、何をしましたか？」

「今日は…」

まだパトカーの中だというのに警察は容赦なく、次々と質問をする。そして、警察署に着いてからは質問の勢いが更に増した。その中で1つ気になることがあった。それは最後の質問の時だった。

「佐藤武美さんを知っていますか？」

僕の身体は思わず、石のように固まった。

「知ってますけど…」

「中山優斗さんの携帯の着信履歴にあったんです。しかし…彼女だけ連絡がつかないんです」

警察が言おうとしていることが何となくわかった。

「僕は最近は連絡を取っていないのでわかりません」

僕は思っていることを言おうかと思っただが心の中にしまった。

「そうですね…わかりました。今日のところはお帰りください。また何かあればお呼びしますので、その時はお願いします」

僕は何も言わずに頷いた。パトカーに再び乗り、僕は家へと帰った。何が何だか頭の中を整理するのが大変だった。数日前までは楽しい生活をしていたのだ。それなのに今は…友美が記憶を失い、優

斗は何者かに襲われ、唯一、何も無く、連絡がつかない武美。僕は自分では信じたくないと思いつつも、武美が中心になっているのではないかと思いつめていた。

第17話 最後の言葉（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

突然、誰かに襲われ命を落とした優斗…。

犯人は武美なのか…それとも…。

少し遅くなってしまうかもしれませんが、第18話目もよろしくお
願います！

第18話 迫る危険（前書き）

9月最初の更新です！

何者かに襲われて命を落とした優斗。

優斗を襲ったのは本当に武美なのか？

大切な友人を失った学の心は…？

第18話 迫る危険

『学、友美を頼んだぞ…』家に帰ってきた僕は何度も優斗の言葉を思い出していた。優斗は最後に何を伝えたかったのか…僕にはわからなかった。とにかく優斗は「友美を守れ」と言っていた。僕に何ができるかわからない。けど、僕ができること…それは友美の側にいることだ。そう思い、病院へと向かおうとした。その時だった。

『プルルルル』

家の電話が鳴った。嫌な予感しかなかった。僕は恐る恐る電話を手に取った。

「はい…」

「学くん！ 助けて！」

僕は優斗から電話が来た時と同じように身体が固まった。いや、優斗の時より動けなくなった。

「…武美？」

僕は今、話している相手が信じられなかった。どうしたらいいのかパニック状態になった。警察でも連絡がつかなかった武美が僕の家に電話をしてきたのだ…

「学くん、お願い！ 助けて！」

武美はずっと『助けて』と言っている。優斗に続き、武美まで危険が迫っているのか？ 僕は一体、どうすればいいんだ…

「どこにいるんですか？」

「駅前の廃墟になったビルの中！　すぐに警察に連絡して！　学くんも来て！」

僕は最初、武美の演技だと思った。しかし、ここまでの話を聞いていて僕には武美の今の状況が演技には聞こえなかった。それに武美は『警察を呼んで』と言った。もし、自分が事件に関わっているとしたら…『警察を呼んで』なんて言うだろうか…

「学くん！」

「はい？」

「愛してる…友美ちゃんを守るのよ！」

そこで電話は切れた。僕は何も言えず、数秒間、立ち尽くしていた。

「警察…」

少しして、我を取り戻し始めた僕は今、やらなければならぬことを思い出した。警察に連絡をして、僕は駅前の廃墟になったビルへと向かった。

「……………」

僕と警察が到着した時、武美はすでに息を引き取っていた。僕は何もできずに大切な人たちが殺されていくことに苛立ちを隠せなかった。

「くそっ！」

一体、誰が、何の目的でこんなことをしているのか…僕は限界だった。

「お気持ちはわかりますが…まずは署の方に行きをお願ひします」

僕はただ頷くだけだった。警察署での事情聴取は2回目ということもあり、かなり厳しかった。「犯人はあなたじゃないですか？」なんてことも言われた。長い長い警察署での事情聴取。僕は友美のことが気になって仕方がなかった。一刻も早く友美のところへ行きたい。そんな僕の思いとは裏腹に事情聴取は終わりそうにない。

「一旦、休憩入れますか。疲れたでしょ」

そう言い、警察は部屋を出て行く。僕はそんな休憩より、早く解放してほしいかった。

「あなたも大変ですね」

休憩中、1人の女性警察官が話しかけて来た。僕が何も言わずにいると、

「もう話すのも疲れたでしょ」

「まあ……」

僕は素っ気ない返事をした。どうでもいい。早くここから解放してくれ。何度もそう思っていた。

「次は友美さん……が危ないわね」

僕はその言葉で怒りが限界を超えた。

「ふざけないでください！　そう思うなら早く僕を解放してくださいよ！」

「あなたが犯人じゃないっていう証拠はあるのかしら？」

僕の怒りを鎮めるかのように女性警察官は意地悪なことを静かに言った。僕は『僕は犯人じゃない』としか言えなかった。

結局、僕が解放されたのは辺りが真っ暗になってからだだった。僕は真っ直ぐ病院へと向かった。面会ギリギリの時間。僕は数分でもいいから友美の顔が見たかった。

「すみません、面会時間は終わりました」

病院に着いた時、僕は希望を打ち砕かれた気がした。わずかだが

面会時間を過ぎていたのだ。

「お願いします！ 5分だけでいいんです！」

僕は何度も頭を下げて、お願いをした。看護師たちは困った顔をしていたが、何とか5分だけ許された。たくさんの注意事項を言葉、僕は一礼をして病室へと向かった。病室に入ると中は真っ暗で静まり返っている。その光景に思わず僕は身震いをした。

「友美…？」

他の人を起こさないように静かに名前を呼ぶ。暗闇なので友美の顔がはっきりとは見えない。

「友美」

もう一度、静かに名前を呼ぶ。友美はゆっくり顔を上げた。そして僕を見て、ビククリしていた。僕は友美が叫ばないようにすぐに口を塞いだ。

「友美、静かに」

僕がそう言うと友美は、ゆっくりと頷いた。

「ゴメン、こんな時間に」

「ううん。どうしたの？」

僕は思わず黙り込んでしまった。

「学くん…？」

不思議そうに僕を見る友美。どう説明しようか僕が考えてると、

「今日は変な学くんだね」

そう言って友美は静かに笑った。僕はこの笑顔を見てホッとした。

「今日はって何だよ。今日はって」

僕は笑いながら、そう言った。すると友美は笑っていた。僕たちは時間を忘れて話していた。しかし、僕と友美は誰かの足音が少しずつ近づいていることに気が付いていなかった…。

第18話 迫る危険（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

犯人かと思われていた武美も犠牲に…

一体、犯人は誰なのか？

そして2人に迫る足音とは…？

第19話目もよろしく願いします！

第19話 絶体絶命の中で（前書き）

第19話目です！

楽しい時間を過ごすと学と友美。

しかしそこへ忍び寄る足音…。

その正体とは…？

第19話 絶体絶命の中で

あつという間に5分という時間は大幅に過ぎていた。もう30分くらいになるだろうか。看護師の人たちも諦めたのか呆れているのか僕を呼びに来なかった。僕と友美は最初こそ変な空気になってしまったが、その後は普段通り楽しく話をしていた。

「学くん、それ失礼じゃない？」

「そうかな？ それなら友美だって失礼じゃない？」

「何で私になるの！」

こんなたわいない話をずっとしていた。時間どころか、周りのことすら忘れていた。まるでこの病室には僕と友美しかいない…そんな感覚だった。

『コッ…コッ…』

誰かの足音が近づいている。しかし、僕も友美も話に夢中で全く気づいていなかった。

「でも、友美が元気そうでホッとしたよ」

「私はいつも元気だよ？」

「そっか。じゃあ今日はそろそろ帰るよ。これ以上いたら本気で怒られそうだし」

そう僕は言ったが、もう怒られても文句は言えない。5分という約束だったのに30分以上も友美と話していた。僕自身すっかり時間を忘れていた。気づいた時には…5分どころか30分以上過ぎていた。

「ファイト！」

友美が笑顔で言う。僕は親指を立ててニコツと笑った。そんな僕を見て友美は笑う。僕にとって本当に幸せな時間だった。僕は病室から出ようドアノブに手をかけた。その時、初めて僕は足音に気づいた。

「ん？ どうしたの？」

不思議そうに僕を見る友美。そんな友美を見ながら僕は足音に耳を澄ます。足音はどんどん近づいてきた。

「友美、隠れてる」

「え？ 何で？」

「いいから。僕の言う通りにして」

「う、うん……」

友美は納得できないという感じだったが、布団をかぶって中に隠れた。僕はそれを確認して再び足音に耳を澄ました。

「あれ……？」

今まで聞こえてた足音がピタツと聞こえなくなっていた。不思議に思った僕はドアを開けて廊下の様子を見た。廊下は真っ暗で何も見えなかったが、人がいる気配は感じなかった。気のせいかと思い、僕はドアを閉めようとした。その時だった。

「うわっ！」

僕は何者かに身体を引っ張られ、廊下に倒された。一瞬、何が起こったのかわからなかったが、目を開けてから初めて自分が倒れていることに気がついた。

『ボタン！』

それから数秒。病室のドアが乱暴に閉められた。僕はすぐに起き上がるとしたが、倒された時の痛みと恐怖で身体が動かない。どうすることも出来ない僕に僕を襲った犯人は口を手で塞ぎ、僕の首を絞めようとする。必死に僕は抵抗したが、相手が馬乗りの形で体重をかけているので思うように力が入らない。

『助けて…誰か…』

一瞬でも気を抜いたら意識を失いそうになる中、声には出せないが心の中で何度も呟いた。

「学くん…?」

僕の意識が限界を迎え、失いそうになった時のことだった。友美が病室から出てきたのだ。犯人は友美の声に驚き、僕から手を離れた。僕はチャンスと思い、犯人を倒した。

「友美！ 廊下の電気を点けて！」

「わかった！」

形勢逆転となり、僕は犯人が逃げられないようにしっかりと押さえつけた。犯人も必死に抵抗してきたが、僕は自分の力の全てで押さええる。そして…

『パチン』

友美が電気のスイッチを入れた。真つ暗だった廊下が一気に明るくなる。僕も友美も犯人も急に明るくなったため、目を開けれなかった。だんだんと明るさに慣れてきた僕は静かに目を開ける。

「……………何であなたが」

僕は目を疑った。犯人を確認してから友美を見ると友美も信じられないというように膝から崩れ落ちていた。

第19話 絶体絶命の中で（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

危機一髪、絶体絶命の中で犯人を捕まえることに成功した学と友美。

犯人とは一体、誰なのか…？

どうしてこうなってしまったのか…？

物語も終盤。第20話目もよろしくお願いします！

第20話 真相（前書き）

第20話目です！

絶体絶命の中、犯人を捕まえた学と友美。
犯人の正体は…？ このような事件になってしまった理由とは…？

第20話 真相

「どうして…」

僕は言葉を失っていた。そこにいた犯人は、

「学くん、友美…ゴメンね…でも、仕方なかったのよ…」

そう言っただけ涙を流した。僕は未だに信じることができなかった。

「お母さん…」

友美がフラフラ横に揺れながら、こっちにやってくる。今にでも倒れそうだ。

「友美…ゴメンね」

友美は何も言わずに頷いた。僕はそんな光景を見て、これが本当に現実なのか疑った。そして自然と涙が流れ出した。

「どうして…どうしてなんですか！」

僕は思わず怒鳴っていた。いきなり怒鳴ったせいか友美と友美のお母さんは一瞬、身震いをした。それから友美のお母さんは一息ついて話を始めた。

「私はあなた方が許せなかった。友美を散々、傷つけて…記憶まで失って…誰がこんなこと許せると思う？ 許せるわけないじゃない！」

そう言った友美のお母さんの表情はさっきまでの穏やかな表情から比べると別人のようだった。

「学くん…あなたもその1人なのよ。あなたと友美の関係を私は何度も見てきた。あなた方なら大丈夫だと思ってたわ。数日前まではこっちに帰ってきて何日目だったかしら。友美が泣いて帰ってきたのよ。『学くん、付き合ってる人がいるみたい』って」

友美のお母さんは具体的な日にちを言わなかったが、きっと友美が初めて僕のアルバイトをしているコンビニに来た日のことだろう。

「そして…あなたが家に泊まりに来た日。あなたはアルバイト先の女の子とキスをした。それなのに友美とは何事も無かったように接した」

あの日の夜の会話も聞かれてみたいだ…。僕は全てが事実なだけに何も言い返せなかった。

「それだけでも友美はたくさん傷ついた。なのにあなた方は…だから私がお仕置きをしたのよ…」

友美のお母さんの表情が再び殺意が宿ったような表情になる。

「私は…私は…たとえ友美が好きな人だとしてもあなたを許さない」

友美のお母さんは今にでも僕に襲いかかってきそうだ。

「もうやめて!」

突然の大きな声に僕は少し飛び跳ねた。

「友美…こんな人を許しちゃいけないわよ。あなたの心をもてあそぶ人なんて…」

『バチン!』

「!?!」

友美は思いつきり、自分のお母さんをビンタした。友美のお母さんも僕も呆気に取られた。

「友美…」

「お母さん、いい加減にして！ 私は学くんを恨んだことなんて無いのに…お母さん、勝手すぎるよ！ 私はどんなことがあつたとしても学くんのが好きなの！ 約束だつてしたんだから！」

「……約束…ね」

友美のお母さんは友美から『約束』という言葉聞いて、そう呟いた。

「でもね、友美。学くんがその『約束』を覚えてるかわからないのよ?」

「……………」

僕は何も言えなかった。それは自分が『約束』を覚えてないから…だけではない。友美は、あの事故で記憶を失った。それなのに僕と『約束』したことを覚えている。記憶を失った友美が覚えていて、自分が覚えていない…そんな自分自身が情けなく感じた。

「いいの…学くんが覚えてなくても…私が覚えてるから」

僕は胸が苦しかった。自分ではどうしようもない、今までに経験したことのない苦しさ…

「お母さん…お願いだから、もう罪を重ねないで…」

「……うん」

それから友美のお母さんは到着した警察に逮捕された。友美のお母さんは抵抗も何もせずただ頷いて警察と一緒にパトカーへと乗った。最後に僕と友美を見た友美のお母さんの表情はすごく悲しそうに見えた。

「それじゃあ、お二人も警察署へ」

友美は入院中だったが、退院が近いこともあって許可が下りた。僕と友美は静かにパトカーへと乗った。

警察署での長い事情聴取が終わったのは朝方だった。僕も友美もほとんど寝ておらず、体力も限界の状態で警察署から出た。

「……」

お互いに疲れもあって何も話さずに歩いていた。ただ僕も友美も行くところとしての場所は同じだった。

「着いたね」

友美が真つすぐ前を見ながら言う。

「僕と友美の一番の思い出の場所だもんな」

やってきたのは思い出の公園。お互いに考えてることは一緒だった。

「とりあえず…座ろうか」

「うん」

僕と友美は近くにあった赤いベンチに座った。しばらくの沈黙の後、先に話を切り出したのは友美だった。

「学くん…ゴメンね」

「何言ってるんだよ。友美は悪くないだろ」

「私…学くんにかくさん迷惑かけたよ。私のせいで学くんを危険な目に合わせちゃったし…」

「謝るのは友美じゃない。僕だ」

僕がそう言うと友美は空を見上げた。

「友美…？」

「学くん、小学生の時のこと覚えてる？」

「うん…全部は覚えてるわけじゃないけど、覚えてるよ」

僕は正直、小学生の時の事をあまり覚えていない。断片的に記憶が残ってるくらい。

「私ね…今でもハッキリと覚えてるんだ」

「何を？」

「私、小学生の時…死にそうだったんだよ？」

友美はわざと明るくそう言った。笑顔で話しているが、僕には友美の辛さが痛いほど感じとれた。

「友美…無理すんなよ？」

僕がそう言うと友美は我慢が限界に来たのか涙が一気に溢れ出した。そんな友美を見ながら僕は小学生の時のことを思い出していた。

第20話 真相（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

犯人は友美のお母さんでした…。友美のことを一番心配したお母さん。

しかし…その心配は事件にまで発展してしまいました…。

我が子を思う故の事件…そんな中、学と友美は思い出の公園へ。

第21話目もよろしく願います！

第21話 わずかな記憶（前書き）

第21話目です！

思い出の公園にやって来た学と友美。

そこで2人は何を話すのか？

第21話 わずかな記憶

「ありがとう。もう大丈夫」

友美は思いつきり泣いて、スッキリしたのか満面の笑みで言った。そして友美は一息置いてから、さっきの話の続きを始めた。

「小学生の時、私がいじめられてたのは覚えてる？」

「うん…何となくだけど覚えてるよ」

そう友美は小学生の時、いじめを受けていた。僕は3年生までクラスが一緒じゃなかったので詳しくは知らなかった。3年生でクラスが一緒になり、初めて友美がいじめられていることを知った。

「学くんは私と仲良くしてくれたけど、いじめは学くんにも…」

そこで友美は、また辛そうな表情をした。僕が頭を撫でると『大丈夫』と聞こえるか聞こえないかわからないくらい小さな声で言った。

「学くんは、いじめられてたこと覚えてる？」

僕はそんなことがあった気もしていたが、はっきりとは思いつけなかった。

「うん、いじめられてたことは覚えてるけど…もう忘れたかな」

僕は小学生の時から、あまり周りを気にするタイプじゃなかった。いじめも気にしてなかったと思う。いじめの記憶がかなり薄いのは

僕が気にしてなかったからだろう。

「じゃあ、私那不登校になったのは覚えてる？」

僕は友美から『不登校』という言葉聞いて、ある一つの記憶が蘇る。
よみがえ

「覚えてるよ…はつきりと覚えてる」

あれは僕と友美が5年生の時だった。友美へのいじめは酷くなるばかりで僕は必死に友美をいじめから守っていた。その度に友美は『学くん、もういいよ』と言った。それでも毎日続く友美へのいじめが許せなくて、僕は毎日、友美の側にいた。しかし、その日は突然やってきた。

「宮本友美さん」

担任の出席確認。友美の返事は無かった。僕の隣の席は誰も座っていないかった。最初は体調でも崩したのだろうと思ってた。友美の家にも行った。友美のお母さんも『体調崩しちゃってね』と言っていたので大丈夫だと思っていた。しかし次の日も、その次の日も、1週間経っても友美は学校に来なかった。友美の家に行っても、友美のお母さんからの返答はいつも『明日には行けると思うから』だ

った。僕はその言葉を信じ、待ち続けた。しかし、結局友美は卒業まで学校に来ることはなかった。そして、友美は小学校卒業と同時に引っ越してしまった。

「学くんは毎日、私の家に来てくれた。すごく嬉しかったんだよ」

僕は毎日、必ず友美の家に行っていた。週に1回くらいしか会えなかったけど、それが楽しみだった。

「私…何で小学校卒業と同時に引っ越したと思う？」

「…お父さんの仕事でしょ？」

僕は友美の次の言葉を待った。今までの話の流れといい、嫌な予感を感じていた。

「ほんとだね…いじめが嫌だったっていうことと…」

「と？」

この答えは予想していたが、理由が1つだと思っていたので少し驚きを感じた。

「…学くんに迷惑をかけたくなかった」

僕はどう答えればいいのかわからなかった。そう思って黙っているよ、

「学くんは私のヒーローなんだよ。そんなヒーローを置いて引越すなんて嫌だった。けど…これ以上、ヒーローである学くんに迷惑をかけることなんて出来なかった…」

「もし僕が友美のヒーローなら、友美は僕に相談してくれれば良かっただろ？」

「うん…だから今年戻ってきた。どうしても学くんに会いたくて。お父さんの仕事の話も嘘なんだ。転勤なんてほとんど無いんだ…。ごめんなさい…」

僕はこの話を聞いて、ひとつため息をついた。それから友美の頭に手を乗せながら、

「友美…バカだよ。何で一人で悩むんだよ…近くに僕がいるだろ？辛いときはお互い様だろ？僕は…友美に笑顔でいてほしいんだよ…」

友美は僕の目を見ようとせずにと下を向いている。

「友美が不登校になった時、僕は友美を助けたい、守りたいって思った。けど、僕は助けられなかったし、守れなかった。友美は何も悪くないんだ。だから、もうそんなこと気にするなよ？ これからは僕がついてる。約束するよ」

僕がそう言うと友美は顔を上げて、

「ずるい…学くんはずるいよ」

と笑いながら言った。その友美の笑顔につられて僕も笑った。

「学くん、いつもありがとう。私…これから強い女の子になるよ」「力が？」

「学くん…何か言った？」

友美の表情が一気に変わった。これは危険だ…

「いえ。何も言っておりません」

「もう…やっぱりするい」

僕は笑って何とか誤魔化した。友美は本気で少し怒っていた。

「じゃあさ、お互いに約束しよう」

「何の約束？」

「友美は過去の事を気にしないような強い女の子になる。僕はそんな友美を支えられるように常に側にいて、友美を守る」

「学くん、約束するのは良いけど…もう忘れないですよ？」

僕は無言で頷いた。もう絶対に忘れない、心の中で固く誓った。

「じゃあ、約束だね」

友美との2度目の約束。あの日の約束は未だにどうしても思い出せなかった。そんなことを考えてると、

「そういえば、学くん。本当にあの日の『約束』覚えてないの？」

まるで僕の心を見ているかのように友美は言った。僕は正直に言った。

「ごめん。途中までは覚えてるんだけど…肝心な場所が思い出せない…」
「そっか。もう6年も経ってるんだもんね。忘れてても仕方ないっか…」

友美はそう言って少し悲しそうな目をした。

「友美…よかったら、その『約束』の話してくれないか？ 僕、何としても思い出したいんだ」

「うん…あの日はね…」

6年間ずっと思い出そうとして思い出せなかった約束…それが今、友美の話によって思い出されるかもしれない。そう思うと僕は緊張した。そして…友美の話が始まった。

第21話 わずかな記憶（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

6年経って再び新たな『約束』を交わした学と友美。

そしてようやく6年前の『約束』が…。

次話で最終話になります。

6年前の『約束』とは一体…？ そして2人の関係はどうなっているのか…？

第22話（最終話）もよろしくお願ひします！

第22話 約束（前書き）

いよいよ最終話です！

6年の時を経て『約束』の内容がついに…学は『約束』を思い出せるのか？

一体、友美と学はどんな『約束』をしたのか？

そして2人は…

第22話 約束

6年前、小学校の卒業式があった次の日。友美はいきなり引越すことになった。僕は友美ともう一度だけでいいから会うために友美の家へ全力で走った。何とか間に合った僕は30分だけ友美と遊ぶ時間をもらった。30分という時間はあっという間で、すぐに別れの時が来てしまった。その時に友美は「私、大きくなったら学くと…」という約束をした。それから僕と友美は6年間、一度も会うことはなかった。

「6年前の約束はね…私の一方的な約束なの。でもあの時、学くんは笑顔で『うん！ 約束だね！』って言ってくれたんだ」
「そんな約束を僕は覚えてないのか…」

僕は改めて自分の情けなさを反省した。こんなにも大切な約束を何故、忘れてしまったのか…

「ううん。6年前だもん。忘れてても仕方ないよ」
「友美は…はつきりと覚えてるの？」
「うん。はつきりと覚えてるよ。私にとっては将来を決める約束だったから…」

将来を決める約束…？僕は少し困惑した。僕がその約束に関わっているということは僕次第で…僕の気持ちや行動で友美の将来は変わってしまうかもしれないということになる。

「小学生の時に将来を決めてたの？」
「全部は決めてなかったけど…学くんとは将来、こうなればいいかなって」

僕は友美の話を聞きながら必死に記憶を呼び起こしていた。6年前の『約束』に関する単語が友美の話で何個かわかった。もう少し…もう少しで思い出しそうなのに…

「学くん、思い出せそう？ 無理に思い出さなくてもいいんだよ？」
「もう少しで思い出せそうんだけど…」

その時だった。僕の頭の中に1つの記憶が思い浮かんだ。

「あ…」

「どうしたの？」

「6年生の夏だったっけ？ 僕と友美の家族みんなでキャンプに行つたよね」

「うん。行つたね」

僕が思い出した記憶…それは6年生の夏に行つたキャンプの記憶だった。友美が不登校になっていたということもあり、久しぶりに数日間、一緒に遊べると思って僕はキャンプをすごく楽しみにしていた。キャンプ当日。キャンプ場に着くとすぐに僕は友美を連れて遊びに行つた。

「友美ちゃん、久しぶりにたくさん遊べるね！」

「うん！ そうだね！」

学校があつた時は週1回くらいしか会えなかつた。夏休みに入つても多くて週2回くらいしか会えなかつた。キャンプは3日間。友美と3日間、一緒に過ごせて遊べる…僕は後悔しないようにたくさん遊ぼうと決めていた。3日間、たくさん遊び、たくさん話をした。しかし、時間は無情にも過ぎていき、あつという間に3日目の夜になつた。僕と友美は寝ることができず、みんなが寝静まつた後に外で一緒に話をしていた。

「学くん、楽しかつたね」

「うん！ 久しぶりにたくさん遊べたね！」

僕と友美は時間を忘れ、たくさん話した。そのうち話は友美の不登校の話になつた。

「友美ちゃん、もう学校に来ないの？」

今、思うと友美には残酷な質問をしたと思う。

「うん…行かないと思う」

「どうして？」

「学校…嫌いだもん」

「僕は友美ちゃんが来てくれないと寂しいよ」

友美はこの話になんかそれ以上は何も言わなかつた。きつと怒っていたんだと思う。

「学くん、今日の月はきれいだね」

友美は話を変えてくれた。そう言われて空を見上げるときれいな満月が浮かんでいた。

「ほんとだ、きれいだね」

「学くん、私ね…」

友美は何か言おうとしていた。僕は友美の言葉を待った。

「私…学くんのお嫁さんになりたい」

僕は全てを思い出した気がした。キャンプでの話、引っ越しの日のこと、そして…あの日の約束。全ての記憶が僕の頭の中を駆け巡る。

「学くん…思い出した？」

友美が僕の顔を覗き込むように見た。僕はゆっくりと顔を上げる。

「思い出したよ。全て思い出した。友美…ありがとう」

全てを思い出した僕は涙を流していた。決して悲しくて流れた涙ではない。全てを思い出せた安堵感とここまでの苦しみが重なって僕の中から涙が流れた。

「どうして泣いてるの？」

「いや…嬉しくて…」

6年間、思い出せなかった。でも…ようやく今、思い出すことができた。

「友美、ごめん」

「うん。ありがとう。私…すごく嬉しいよ」

「約束は絶対に果たそうな」

「うん！」

そう誓い合って、僕と友美は静かにキスをした。公園では小鳥たちが鳴いていた。まるで僕と友美のことをお祝いしてくれるかのよう。

あの日から5年。僕と友美は結婚した。約束してから11年。僕と友美は約束を果たすことができた。

『私、大きくなったら学さんと結婚する。約束だよ！』

『うん！ 約束だね！』

あの日の約束。小学生同士の小さいながらも大きな約束。もし、

この約束をしていなかったら…この約束をお互いに忘れていたら…僕と友美はどうなっていたのだろうか。僕は未だに時々、そう考え
て怖くなることもある。

「もう、学くん。また昔のこと考えてるでしょ…」

何故かわからないが、友美には必ずバレてしまう。

「過去の約束は果たしたんだから、気にしないでよ」

「うん。ありがとう。友美が側にいてくれると思うと心強いよ」

確かに昔のことを考えると不安になる。でも今の生活は幸せで友
美と話すとその不安は一気に消えた。

「それに5年前に新しい約束、したでしょ？」

「何だっけ？」

僕は笑いながらそう言った。僕は冗談のつもりだったのだが…

「あゝ忘れないって約束したのに！ もう学くんなんか知らないん
だから！」

友美は僕の腕を叩きながら、そう言った。

「じょ…冗談だってば！ 忘れるわけないだろ！」

そう言つと友美は叩くのは止めたが、まだ納得できない様子だっ
た。

「友美が過去の事を気にしないような強い女の子になる。僕がそん

な友美を支えられるように常に側にいて、何があっても守る」

約束の中身を僕が言つと友美はやつと笑顔になった。

「約束したんだから…: 学くんが過去を気にしちゃダメでしょ？」

「そうだね…: こんなんじゃ友美を守れないな」

「だから…: 約束でしょ？」

友美が満面の笑みで僕に言う。この笑顔を見る度に僕は幸せだなと感じる。

「うん。『約束』だね」

僕と友美は新たな『約束』を胸に刻み、その『約束』をいつか果たせるように新たなスタートを切った。

第22話 約束（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

『約束』無事に完結することができました！

途中で諦めようなんて思った時もありましたが、みなさんの応援のおかげもあって、最後まで書くことができました。

最後まで読んでくださったみなさま、途中だけでも読んでくださったみなさま、本当にありがとうございます！ 読んでくださったみなさまに感謝です！

この小説で『約束』の大切さを感じてもらえればな、なんて思っています。

活動報告にも書いたとおり、新作を書いています。なるべく早く書いて投稿したいなと考えてます。

最後にもう一度だけ、本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9324r/>

約束

2011年9月20日06時32分発行